八丈綺談

おこま才三郎

特259
659

始

特259
659

曲亭馬琴著

蘭齋北嵩畫

八丈綺談（おこま才三郎）

東京
大阪 藤谷宗文館

帝國圖書館藏

佛教の三世因果の教旨を作意の種にするのは文化文政度の小説の紋切形であるのだが、學問が深かつたゞけに、馬琴はそれが最も巧みであり、念入でもあつた。其馬琴の作の中でも此八丈綺談の知きは全く徹底的の業報づくめ、其點から見て一種の代表作といつてよい。お駒才三の單純な情話がこんな複雜な因果話とならうとは誰が豫想しよう。八犬傳を丁度書きはじめた四十七歳の馬琴でなくては出來ぬ巧緻な作意である。北齋門の北斎の挿畫は師とは行き方を異にして大抵當時の名優で畫いてゐる。

坪内逍遙識

八丈綺談序

夫勤書之苦。著述之勞。古人最懼之矣。謝在杭曰。思慮之傷命。甚於酒色。有以乎。余遊戲筆墨者。二十四年於此。殫精竭慮勞又甚矣。自是用心於藥餌或丹或湯。嘗補劑者。亦復有年矣。雖然。未能取倒其倚樹碎其據梧之效也。一日閱許氏本事方有奇方曰。用損讀書一。減思慮二。專內視三。簡外觀四。旦起晚五。夜早眠六。凡六物。熬以神火。下以氣箠。蘊於胸中七日。然後納諸方寸修之一時。近能數其目睫。遠視尺箠之餘。長服不已。洞見牆壁之外非但明目亦延年。晉張湛。嘗授范寄者是已。余視其方之可治焉。卒然欲試之乃不果固有原憲之窶無子貢之殖。自非勞意思於著述。豈

得レ畜二數口一。縱以二奇方一故。雖二能耐レ老延レ年。又由レ此苦二於飢寒一。則亦何益。既已有二良方一。無レ由レ採レ藥已矣。諺曰。雖レ有二珠玉一。不レ如二金錢一。雖レ有二神藥一。不レ如二少年一。徐福島子。入レ海而求レ遷。還レ江而訪レ故。無レ益二於和漢一。如二二子一。徒知二其方之不レ死。又惡知二採レ藥之無レ塗。至三今爲二俚俗所一レ笑。我唯欲二與レ此異一レ趣。得焉哉。故欲レ收レ末者。先治二其本一。欲レ固レ蔕者。必深二其根一。設夫始不レ固。又不レ揣レ終猶且耐レ久者幾希矣。嘗試譬レ之白龍之爲レ神魚服而不レ能レ避二余且之網一。豈有レ他哉。微行悞伴二細鱗一。狂態嫚二於人間一。蓋遊戲之失也。我唯欲レ笑レ之。又不レ可レ得。今茲及レ著二此書一。卽述二此事一。以解レ頤。

文化十年癸酉三月十又四日書二於著作堂雨牕一

八丈綺談姓氏略目

齋藤道三　齋藤義龍　牧村衞門長晴
尾花才作　尾花才三郎　蘆月角六
蘆月一角　白木諸平　手口鍱介
獵人復市　獵人株藏　倆子諸太郎
僧的心　小厮岐藏　主管丈八
牧村牛介長通　小桔梗　間柴
喚聲　囮　斧
活駒　阿駒　澳水

姓氏略目終

作善百祥
不善百殃

西方論
緣業
早く
愉悪俗

白木屋
お駒
尾花才三郎

在原
尾花
吹村の治助

僧曰
霧海沾洲
苔云
鉤鐘建立
日參

八丈綺談總目錄

發端　尾花の秋　　證歌　しるしらずまれくを見ればみちのへのをばながそでにあき風ぞふく
又　蘆の一叢　　證歌　長川のしほのみちひにあきくれていな葉にまがふあしのひとむら
第一　不破の關　　證歌　しばしともなどかとゞめぬ不破の關いなばの山のいなばいねとや
第二　落黄葉　　證歌　みるまゝにとまらぬ人ぞなかりけるちるもみぢばや不破のせきもり
第三　旦煙霞　　證歌　ふはのせき朝こえゆけばかすみたつ野上のかたにうぐひすぞなく
第四　あし見の駒　　證歌　不破のせきあしみの駒にをしえゆくこゑばかりこそかすまざりけれ
第五　驛舍の鈴　　證歌　あづまぢの不破のせきなるすゞむしをうまやにかふとおもひけるかな

美濃舊衣八丈綺談

（お駒才三郎）

東都　曲亭馬琴著
北嵩　重宣畫

卷之一

尾花の秋

天文年間かとよ、稻葉山に居城して、美濃の國主と時めきし、齋藤山城守道三は、西京の人にして、いと貧しかりし時油を賣りて活業とし、又今樣の曲子を好みて、聲妙に唄ひつゝ、遂に美濃路に遊歷して、國守時賴藝が長臣たる長井東左衞門に愛せられ、幾程もなくその家の老臣になりつ。道三元來大なる志あるものなれば、賴藝主從惰弱にし

て、州民はなれ背くを見て、私恩を施し黨を樹て、主の長井が死するに及びて、軈てその采地を横領し、勢ひに乘しつゝ、竟に數郡を擊從へ、剩へ國守賴藝を滅して、濃州を一圓に管領せばやと思へども、時氏は累世當國の守護なり。國亂れ民叛くものから、なほ舊恩を思ふものゝかり、流石に事を卒爾にせば、民の望を失ひて、竟に大事成就がたかるべし。竊に腹心のものをもて、賴藝をうしなはし、後やすくするには如かじと、心ひとつに思ひ決めにけれど、人の諫めんことをおそれて、伊賀、牧村、稲畑等の諸家老にも、絶えて意中の機密を告げず、誰を欲得と思ふ程に、年來不便のものとして召使ふ小扈從に、尾花才作、蘆月一角といふものありけり。尾花はその性、學問を好みて謀あり。蘆月は人となり、武藝を嗜みて心悍し。いづれも年なほ若けれども、主の爲には命を惜まず、二心なきものなるに、彼等ならでは誰にか命せん。實に才作が智をもて謀り、一角が勇もて擊たば、いと易かるべき事なりとて、こゝろに撰定めつゝ、有一日道三は、件のものどもを招きよして、竊に思ふよしを聞えしらし、汝等ともかくもして富田の館へ潛入り、賴藝を刺殺して、わが爲に患を除かば拔群の忠なるべし、恩賞は乞ふに任せん、努、人になしられぞ。と正首に密語は、一角は聞きもあへず、滿面に笑を含み、仰せ承はり候ひぬ、彼人の首級を齎し、見參に入れんこと、三日の外を出づべからず、御こゝろ休へ給へかし。と絳もなげに應へしかば、尾花は呆れて思はずも、主の面をうち守り、御諚では候へども、この事しかるべきおん企とも覺え候はず、賴藝ぬし惰弱にして、美濃の守護職を停廢せられ、富田の正

德寺にをはしませども、桀紂が惡虐をなし給ふにもあらず。運に時あり、人に盛衰あり、君天運に叶はせ給へば、微賤の御身として、濃州數郡を領し給ひ、彼ぬしは名家の後にして、先祖相傳の采地を喪ひ給ひぬ。こは戰國の流俗にして、例多かることなれども、これを殺すは不仁なり、人多ければ天に捷ち、天定りて人に捷つ。抑不仁不義にして、子孫繁昌するものなし、空怖ろしきおん企は、應へ申さん所をしらず、おもひ止まり給はんことのみ、願はしく候。と一角を尻目にかけて、思ひの外に諫めしかば、道三これを聞きもあへず、呵〻とうち笑ひ、われも如此思ふかし、今わが云ひしは戯れなり。假初に言を設けて汝等を試みたるに、一角は勇氣餘りありて、思慮足らず、才作は思慮餘りありて勇氣足らず。彼が擊たんといひしも忠なり。是が犯して諫むるも忠なり。しかれども、徐かに理非を辯ずれば、才作が申すところ主に益あり。汝等こゝろを一致にして、わろしと思ふことあらば、憚らず我を諫めよ、けふの事は才作勝れり。引出物すべけれとて、左文字の刀をとらせしかば、尾花は感涙を拭ひあへず、弱年なる微臣が異見も、時にとりては御心に稱せ給ふ、公私の大幸これに過ぎず、君既に絶えたるを繼ぎ、廢れたるを興し給ふ、仁義の御心在さば、諫鼓ありといふとも苦蒸して、當國永くおん手に入るべし、歡びこれに增すものなし。と祝しつゝ、祿給はりて、おん前を退出しかば、蘆月一角は面目を失ひつゝ、思はずも嘆息し、時賴藝は當家の爲に、實に腹心の病なり。渠當國にあらん程は、遂に子孫の患ひをなすべし、戯謔も思ひより出づるといへり、戯れなりとは宣へども、竊に賴藝を

失はんこと、謀その圖に當れり。騏驥も衰ては駑馬に及ばず、わが君いかなれば、迂遠き才作が仁義の講釋に說惑はされて、盜に糧を齎し、讐に刃を藉し給へる、心得がたし。と呟けば、道三莞爾とうち笑みて、一角さのみ恨みなせぞ、今われ汝と才作に、心中の機密を告ぐるに、渠奴慾いに從はず、博士ぶりたるゑせ諫言を、聽くべうも思はねど、謀は洩れ易し、よりてわれ、戲れにいひ紛らし、諫言を納れ引出物をとらし、渠が心を安くせしは、事を洩さじと思へばなり。汝が武勇は才作に勝れり、身ひとつなりとも富田に赴き、賴藝を擊つべきや。といへば一角小膝をすゝめ、そは御諚にや及ぶべき、唐山の秦舞陽は、その年纔に十三なれども、燕の太子に相譚はれて、秦の始皇を刺んとせり。某今茲廿一歳、秦舞陽に比れば、年さへ既に八つましたり。御

ゆるしだに蒙らば、君が武德を頭に戴き、竊に富田へ赴きて、賴藝を刺んこと、掌を返すよりいと易かるべきことながら、心惜きは才作なり。渠は當家の長臣たる、牧村衞門が婿なれば、只今君の仰せしよしを、いかで舅に告げざるべき、告げなば君を疑はん歟。さるときは妨あり、妨ありては事成らず、只この密事をしれるものは、某と才作のみ。竊に尾花を殺し給はゞ、人にしらるゝ由もなく、又疑はるゝよしもなし、賢慮をめぐらし給へかし。と言葉を巧みに申せしかば、道三聞きてうち點頭き、汝が遠謀わが意に稱へり。然らば今宵才作を城外へ誑引出し、人しらず擊つて捨てよ、その詭計は箇樣〳〵と、主從耳を取交して、閑談時を移しけり。抑〳〵蘆月一角が今緯の便宜を得て、尾花才作を闇擊にし、渠が舅牧村さへに追ひ失はんと巧る事、一朝の

怨にあらず。彼牧村衛門に、兩個の子どもありけり。冢子を牛之介と名づけ、末女を小桔梗と呼びつ。小桔梗二八の春を迎へて、遠山の眉翠をまし、桃李の唇匂やかなり。さらぬだに、色に愛で權につく。皆な是人の情なれば、一角はいち早く、小桔梗を娶らんとて媒妁をこしらへつゝ、その事を云はせしに、衛門は渠が人となり、こゝろ得がたきことのみなれば、この緣談を承引かず。みづから擇みて小桔梗を、尾花才作に妻せしは、去〻年春のことなりき。一角はこの事を、いと口惜しく思へども、牧村は權家なり、才作はその婿なり。今故なくして彼等と爭ひ、捷をとるべきやうのなければ、恨を隱して氣色に見せず、事もがなと思ふ程に、はからずも便りを得て、心の中に深く歡び、まづはや尾花を擊たんとて、準備をしたりけり。さる程に才作は、この夜直寢なりしかば、遠侍に臥したるに、子二ツの比、宿所より使來れり。妻の小桔梗が、暴に疾病ひていと危し、とく退りて看病ずば、息の内には會ひがたからん。と忙しく告ぐるものあり、才作これに驚かされて、緣由をことわり申し、軈て主君の許を稟けて、走り出でつゝ使を喚ぶに、何處ゆきけん應へも得せず。心得がたく思ひながら、うちも置くべきことならねば、從者をも俱せず只ひとり、東の城門のほとりなる舅牧村が門を敲きて、綽の趣を告知らし、城の後門より走出て、長柄川の上りなるおのが宿所を指てゆく。比しも五月望の夜のことなれば、天霽れやらぬ薄月夜、途さへいとゞぬかりつゝ、蹴揚の泥に裳おもくて、歩の運びも思ふに任せず。引提げたる傘もて、夏草の露搔拂ひ、辛うじて十町あまり、稲葉の城を背にしつ、人家さへに

十九村雀つ
あ月一角

尾花才伯

遠離る、小松原をゆく程に、目さきに晃く刃の電光、聲をもかけず擊つ大刀風を、嗟吐とばかり左手に辷らし、疊みかけたる刀尖を、傘もて丁と受止め何者なれば名告も得せず、獨りゆくわれと見て、引剝せん爲ならば、可惜命を失ふべし、この賊奴。と罵りつゝ、面を佶と透しながめて、思はず再びうち驚き、こは蘆月一角歟。と問へば刃を閃りとひきて、頰冠りせし手拭を、かなぐり捨てつゝ冷笑ひ、ほざいたり尾芳才作、迚もかくても活けてはかへさず、冥土の裏に一伍一什を、說知らして成佛させん。根を斷つて葉を枯す、主君今度の御企は、その圖に當ると知りつゝも、博士ぶりたる汝が諫言、二心あるものなりとて、いたく憎ませ給へども、明〻地に罪なはゞ、是より綽の破れとなりなん。さればとて助けおかば、遂に密事を洩らさるべし。且く心を安くさせ、計ふべき術ありとて、諫を納れたる面持して、左文字の刀を賜りしは、汝が命を斷ん爲なり。よりてわれ密に仰をうけ給はり、汝が妻の小桔梗が急病なりと詐欺て、更闌けて囮掖出し、こゝで殺すは是主命、年來憶をかよはせし、小桔梗を娶られたる怨を復すはわが宿望、二ながら果さん爲に、汝を俟つこと久しかりき、刃を受けよ。と敦圉ば才作聞きて歎息し、良藥は口に苦く、諫言は耳に逆ふ、比干は諫めて胸を裂かれ、伍子書は鴟夷の皮に盛らる。忠臣の鬼となりて、屍をこの野に曝さんこと、固より庶幾ふところなり、さればとて、奸佞にして主を惑はす、汝が爲に阿容〻〻と獨り命を隕さんや、冥土の伴侶覺期せよ。と云はせもあへず一角は、引提げし刀を額に翳し、無益のくり言誰かは聞かん、死出の山路へ疾く走れ。と罵る聲と

諸共に、揮閃す刃の下を、左右よりかい潜る、尾花も刀を拔合し、一上一下、劣らず勝らず、鎬を削る大刀音の、丁と擊つては引分れ、又丁々と挑みあふ。刀尖より火を出し、奮擊突戰時を移せば、一角は日來より、屑とも思はざりし、才作が武藝侮りがたくて、拳は紊れ大刀すぢ狂ひ、受流したる刀尖あまりて、眉間を碾と砍著けられ、株に跌き度を失ひ、尻居に撞と轉輾べば、才作得たりと跳蒐つて、又腸を丁と斬る、刃に携りて身を起し、辷り跌く雨後の泥に、流るゝ鮮血を踏茄て、矢聲を激し戰へども、深痍なれば勢竭きて、遂に尾花に擊れけり。かくて尾花才作は、思ふまゝに砍伏したる、一角が吭を鍔元まで刺徹し、軈て死骸にのぼしかゝつて、血刀を把直し、肚を斬らんとする程に、やよ俟て尾花。と喚びかけて稻塚のほとりより、遽しく走り出づるを誰れと見れば、別人ならず、才作が舅なる牧村衞門長春なり。思ひがけなき事なれば、こはく如何に、とばかりに旦く刃を止むれば、牧村頻りに嗟嘆して、稍その貌をうちまもり、わが今茲に來れるを、訝しく思はれん。曩に和殿が門を敲きて、小枯梗が頓の病氣、いと危しとて宿所より、使來りぬと告げしかば、胸うち騷ぎて睡られず、行きて見ばやと思ひつゝ、更闌けたるに私卒奴隷を、呼覺さば時や移らん、子を思ふ闇には從者をも俱せず、こゝに來て圖らずも主君非道のおん企、一角が奸曲さへ渠口づからいふ由を、初めより竊聞て、驚きおもふ所なり。人を殺せば脫るべき、みちしなくともそが儘に、自殺せんはなほ早かり、まづその刃をおさめ給へ。と云へば才作形を改め、主君此度のおん企、わが厄難の緣故さへ知られまゐらせ

たれば、告ぐるに及ばず、一角は毒悪なる、佞人なれども某を、殺さんとせしは主命なり。とは初めより知りつゝも、渠を撃ちしは主君を惑はす、蠱毒をこゝに禳ひ除きて、忠を泉下に盡さんためのみ。しかりとも御使を、殺したる罪脱れがたし、是迄なりと云ひも果ず、又刀尖を左手にめぐらし、肚へ突立てんとしたりしかば、衛門は急に推禁め、さのみな早りそ、いふよしあり。主に仕へて私なく、をさをさ有用の壯佼なりとも、女兒が係る和殿の必死、恩義に絆され愛に溺れて、われまた女〻しく禁めんや。死は易くして、生は難し、迚も死ぬべき命なりせば、箇様〻〻に計りまうして、主君を諫め奉らば、事成らずしておん佩刀を、穢さるゝことありとも、死をもて盡す忠臣の、誠に主君の惑ひも解け、大約此度の御企を、思ひ留まり給ひなば、こゝにて命を隕さんより、遙に倍したる幸ならずや。短慮は功を成しがたし、年わかければかゝる時、思慮あるに似て業足らず、わが禁むるはこの故なり。かくても自殺し給ふやと、理り迫たる言の葉に、今散りかゝる花婿も、思ひ返して打點頭き、可得は老功、說得て好し、しからば且く自殺を止めて、再び主君を諫め申さん。さはとて血刀おし拭へば、月の劍も雲霧れて、二人が胸におさめたる、鞘とさやかに照せども、身はなほ暗き樹下闇に、おちかへり鳴く杜鵑、死して冥土へいな葉山、無常を示す遠寺の鐘に、曉かた近くなりにけり。不題齋藤道三は、その夜さり人しれず、尾花才作を殺せとて、蘆月一角を遣はせしより、いかに〳〵と俟つほどに、臥房には入りながら、通宵いも寢られず、はや曉なんとする頃に、臥房近く來るものあり。一角歟と問

へば、然りと答ふ。疾く此方へと呼入れて、屏風を推開きつゝ出て見るに、一角にはあらずして、今はや死せりと思ひたる、尾花才作なりしかば、呆れ果て太息を吻き、汝何とて參りし。と問へば才作さんさふらふ、きのふ微臣が諫言を諾せ給へども、畏くも御心を推量り候へば、思ひかへし給ふにあらず。よりて某、昨夕富田へ酒びゆきて、賴藝ぬしのおん首紙を、給はりて候へば實檢に入れんとて、推參して候なり、疾く縛はせ。と首桶を、ほとり近くさし寄せて、やをら蓋をかい取るを、と見れば綷みな齟齬て、一角が頸なれば、道三勃然として膝立直し、やをれ才作、汝は誰が許を稟けて、一角を殺したる、此者何等の罪かある、云ふよしあらば云へ聞かん。と敦圉ながら枕に立てたる、刀を取りて反うちかへせば、才作騷ぐ氣色もなく、一角は君

を惑はす、奸佞の癖者なるに、なほ罪なしと宣ふは、千慮の一失是非に及ばず、君に媚びて惡を勸め、絶えて安危を念とせざる。かゝる嗚乎の癖者を、罪なしとし給はゞ、賴藝ぬしはいよ〳〵罪なし、いかばかりの恨ありて、亡はんとはし給ふやらん、微臣が迷ひこれ一ッ。又時殿は當初、君が馬を繫ぎ給ひし、長井氏の主君にして、當國の舊主なり。勢竭て一鄕に、その身を置兼ね給へばとて、これを擊たんは非道なり。民の心の歸る所は、只義の一字にあるものを、非義非道の行ひあらば、何の民かわが君を、君として仕ふべき微臣が迷ひこれ二つ。君が諱の道三は、原是曾子の語に出て、道に貴ぶ所は三、とあるには違ふ暴慢不信、こゝろ鄙倍在さば、貴道の三つは皆な闕けなん、微臣が迷ひ是三つなり。愚なる心にも、既に三つの疑迷あり、君もし非義のおん企を、思ひ止まり給はずは、一國の民みな疑ひて、忽地離れ背くべし。地を闢き國を富すは、德を積むにますことなし、民德風に靡くときは、遂ひ給はずとも賴藝ぬしは、遠く走りて歸る日なからん。この理りを申さん爲に、主命を受けたりし一角と知りつゝも、渠を擊ちしは私ならず。きのふ微臣に給はりし、左文字の刀の德によれば、奸曲邪智の癖者を、わが君の御手づから、擊せ給ふに異ならず。しからば今この首實檢は、賴藝ぬしのおん首級を、見給ふにまして愛からずや、君に過失ましましても、老臣は祿を重んじて諫め奉らず、外樣のものは申すとも通せず、諫言の道塞るときは、貴人みづから法を犯して、その非を改め給ふに由なし。よりて某、恩賜の刀をもて一角を殺し、臣として君を凌ぎ、下として上を犯す、身の罪を見かへらず、

なしがたき事をなし、いひがたき事をまをすも、皆是君の御爲なるを、猶憎しと思召さば、身は醢にならばなれ、固より惜む命にあらず、申せしよしを一言半句も、用ひ給はゞ一期の大慶、公私の幸ひ此上なしと、席を拍ち涙を流し、拔放さんとする刃の下へ、推直りつゝ首を伸し死を究めたる壯士が、誠忠氣色に顯はれたり。はじめ怒りし道三も綽みな道理に逼られて、拿る刀の手もとも緩み、おもはずも歎息して、琢磨とうち納め、嗚呼過てり失ちぬ。諸侯に爭臣五人あれば、その國を失はずと、聖經にあるよしを、今こそ思ひあはしたれ。こゝにわが非を知る時は、いかで汝を賞せざらん。實に蘆月一角は、奸佞の癖者なりき、汝わが刀をもて、渠を擊ちしは尤よし、この事祕て人になしられそ、退りて休ひ候へと、思ふにまして感得せられ、わが身再び生きたるより、なほ歡ばしさに才作は、涙坐に禁めあへず、寛仁大度に在せばこそ、諫め申せしかひはあれ。今の御諚は一郡を、給はるにまして候と、回答まうして首桶を、袖に纏ひて押隱し、やがて宿所へ退出つゝ、密やかに一角が頸を埋めて人にしらせず、是よりして道三は、よろづ行狀を改めて、生けるを愛し、殺すを嗜まず、己を正くして佞人を遠ざけ、善政をさ〳〵彼此に聞えしかば、美濃の州民みな歡びて、隷從はざるものもなし。こゝに至りて時賴藝は、憑む樹下に雨もりて、富田にも堪り得ず、誰逐はざれども逐電して、往方もしらずなりしかば、道三が志願忽ちに成就して、刃に釁ず國おさまりぬ。是併しながら、尾花才作が精忠によれりとて、それとはなしに加恩の地五百貫を與ふるに、才作は辭して受けず、つく〳〵と思ひやるに、

波風しくめる今の世の、人の心に常なければ、君の寵も憑みがたく、身の功も誇るによしなし。彼蘆月一角は、奸佞の癖者なれども、渠もしわれに撃れずば、わが君いかでか感激して、輙く諫を容れたまはん、わが績は彼にあり。しかるに蘆月は、その家既に斷絶して、われのみ獨り加恩を受けては、心に愉しともおもはず。加旃、一角を撃つときに、左の臂を傷られたるが、その痍ははや癒へたれども、折〻疼み堪へがたし。物に祟はあらずとも、吾懲に用ひられて、人の妬媢を受けんより、仕を返して世をやすく、おくらばやと思ひしかば、まづ舅牧村に相譚ひつゝ、病に托け只願に、身の暇を乞ひしかば、牧村衛門は云ふもさらなり。道三はふかく惜みて、懇に止めにけれど、再三再四乞ひまをせば、主もさすがに術なくて、身の暇をとらせけり。

時に天文元年秋九月、尾花才作は、妻の小桔梗と去〻年の冬擧けたる、一子才三郎のみ携へつゝ、稻落山を退きて、同國不破郡なる、關の小川のほとりに赴き、こゝに二町三反の田園を購得て、親子三人が衣食に充て、富むにあらねば身もやすく、讀書學問をのみ事とするに、妻の小桔梗もその性怜悧ものなれば、ありし昔を戀しとも思はず、みづから火を焚き水を汲み、よろづ質素を旨としつ。訪れぬ宿もなかゝに、わが子ひとりに慰めて、尾花の秋も今一しほ、ながめに倦かぬ心持せり。

蘆の一むら

蘆月一角が父を角六と云ひけり。年四十に及ぶまで、子ども一人もなかりしかば、竊に美濃の尾山なる、因果塚に祈りつゝ、一角を擧けた

り。美濃の尾山は不破郡にあり、こゝに古墳あり、因果塚といふ。人若しその庶幾ところを因果と唱へて祈るときは必ず靈驗あり。しかれども信心等閑なるときは、却て祟ありといふ。かるが故に、おそれて祈る者もなきに、蘆月角六は子なきを深く歎くのあまり、しのびくに參詣して、竟にその利益を得たり。これによつて、主の道三が稲葉の城を築きし頃、頻りに因果塚の利生を唱へて、あはれ彼山に、一寺を再興し給へかし。と只願勸めまうせしかば、道三この議いかゞあるべしとて、諸家老に問はれしに、或ひはしかるべしと應へ、或ひはしかるべからずと申して、衆議一決せざりけり。時に牧村衛門、後れて參りぬ。道三又彼塚の事を告げて、その是否を問はれしかば、衛門答へて、この議甚だ然るべからず、彼因果塚の緣故は、里老の口碑に傳ふるを聞きて候ひしに、むかし在原行平朝臣、美濃守たりし頃、野上の里なる柏手といふ手溺女を召されつゝ、淺からず契り給ひしが、任帙果て歸洛の日、再會の像見とて、年來手ならし給ひたる硯の背へ、立わかれ稲葉の山の峯におふる、松とし聞かば今かへり來ん。と留別の歌を雕著け、是を柏手にとらしつゝ、都へ上り給ひけり。世にこの歌を、行平須磨へ左遷のとき、詠じ給ふといふめれど、稲葉山はいにしへより、當國の名所にして、行平朝臣の美濃守たりしよしは、國史に見えて灼然たり。かくて柏手は行平を戀慕ひて、件の硯を身さへ放さず、乾さぬ袂の露霜に、去年と暮し、今茲と明せば、いとゞ歎きに堪へかねて、世をうらみ身を果敢なみ、硯を友と墨染の、衣にやがて容を變え、美濃の尾山に庵を締びて、生涯行ひすませしが、その迹竟

に寺となりて、柏芒寺と號しける。住持の僧、數代の後、午句坊といふ惡僧住職せり。この頃不破の郡司が後家に、谷折といふもの、良人がゐまそかりし日より、午句坊に魅され、密通夥の年を經て、良人郡司が世を去りては、いよゝますゝ憚らず、夜な〳〵柏芒寺へ通ひつゝ、彼惡僧と快樂せしかば、里人大方これを知りて、あざみ笑はざるもなし。又彼都司に一子あり、其名木二郎と呼れて十五歳になりぬ。松の操に得もならはで、色には染まるはゝき木の、うき名聞くだに口惜きに、われさへ父が子にあらず、彼密夫の胤なれば、その面影もおのづから、牛句坊に肖たりとて、里人等が口さがなき、蔭言さへに漏れ聞きつ。淺猿しき事いふべくもあらず、よからぬはらに寄生の、身のなる果をいかにせん。われや形貌は人にして、獸の生を稟けたりけ

ん、親ならぬ親と云はせ、人ならぬ人と云はれんより、親と親とが手にかけられて、此身を殺さば年來の、惡行を改めて、誠の道へ入り給ふ、鄕導ともなりぬべし。さはとて獨り死を決め、あるとき母が例のごとく、柏芒寺に止宿せし夜、木二郎は面を包み、形を變え、更闌けて彼山寺へ潛び入るに、案内はよく知つたり。法師と母が枕方なる財布の金を引出し、驚き覺めよと云はぬばかりに、二人が枕を礫と蹴て、足音高く走り出づれば、吐嗟と驚く惡僧淫婦は諸共に身を起し、偸兒待てと喚びかけつゝ、中にも谷折はいち早く、竹緣のほとりにて、木二郎を引とらへ、揉倒さんとする程に、顏を見せじと背向になりて、母を推退け衝退くる、その隙に午句坊は、戒刀を引拔きつゝ、走り蒐つて木二郎が、右の腕を打落せば、苦と叫びて仆るゝ處を、谷折は上

因果塚の
牛句坊
木二郎

谷斬

へのぼしかゝりて、押へて頭をかゝせけり。さて灯をともして砍殺せし、偸兒を見れば思ひがけなき、牝牡が中に擧げたる、花も蕾の木二郎なり。懷中に遺書あり、親の惡事に身を怨み、かう詭計て死ぬるといふ、筆に誠を見はせしは、孝とやいはん、賢とやいはん。淫樂に譏を思はず、良人を良人とせざりける、谷折なれども今更に、わが子の横死に心も消え、恨みの限りかき口説き、腸を斷つ哀傷の、涙と共に聲を惜まず、流石に子にや差たりけん、彼戒刀をかい取りて、吭かき切り死したりける。されば此山寺を午句坊が住持してより、漸〳〵に荒まさり、徒弟同宿等もをらずなりて、この時僅に錢八貫一百文の外に物もなければ、木二郎が取りて走りたる、財布の中なるは金ならで、乃ち當時の什物たる、稲葉山の硯なり。破戒無慚の惡僧も、親には過

に勝したりける。かくし子を手づから殺し、最愛の梵妻さへ、眼前に自殺せしかば、且つ哀み、且つ慚て、共に死なんと思ふのみ、愛惜のやるかたなさに、まづ谷折と木二郎が死骸に石を著けて、庭の池水へおし沈め、又彼稲葉山の硯を投入れ、錢八貫百文を、おのれが腰へ繫ぎ著けて、おなじ深水へ身を投げたり。これより夜な〳〵冤魂顯れ、奇異なる事のみ多かりしかば、移住する法師もなく、忽地に廢寺になりて、礎の蹟のみ殘せり。しかれども、冤魂とにかく鎭り得ねば、里人等件の池を埋めて、塚を築き、因果塚と稱へつゝ、祈れば必らず靈驗あり。然れども信心後に等閑なれば、祟ありといひ傳ふ、彼塚の緣起斯くの如し。かゝればこれ不祥の塚なり、よしや些の靈ありとも、元來惡鬼の所爲なれば、信ずるに足らず、祟むるに足らず、軍用乏し

きこのときに、數百年絶えたる寺を、再興あらんは物體なし。と故事を述べ、道理を正し、叮嚀に止めしかば、道三聞きてうち點頭き、しからば是無用の塚なり、只惜むべきは稻葉山の硯のみ、件の塚を發かして、硯を取らばやといふに、衞門は又これを諫めて、鬼神は敬して遠ざくとこそ承はれ、一箇の硯を惜ませ給ひて、祟ありと云ひ傳へし、塚を發かし給はん事は、いよ〳〵もつて物體なし、うちおかし給へかし。と申すにぞ、道三これをしかりとして、遂にその沙汰に及ばず、蘆月角六は、やうなきことを勸めしとて、忽地主に見おとされて、いたく衞門を恨みにけれど、爭ひ訴へん由もなく、因果塚へ詣でん事も、今更嗚呼なる所行に似て、主君へ憚なきにあらねば、祟むる心もおのづから、等閑になりにけり。さる故にや五年前に、角六夫婦は時

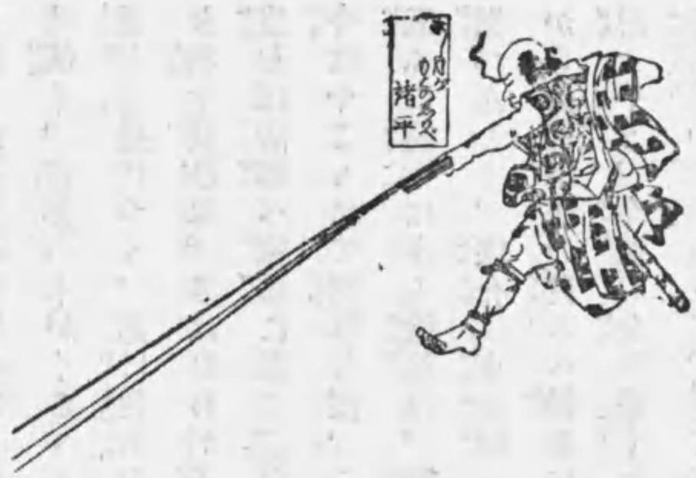
疫にて、おなじ比に身まかりぬ。又彼塚の祈子なる一角は、心ざま奸曲にて、才作に擊れしかば、その家終に斷絶せり。閒話休題、一角が横死の事、誰が所爲なりとしるものなく、嗣すべき子もなきものなれば、その所領を沒收せられ、家財を估却せらるゝに、五十金に代へたり。牧村衞門うけ給はりて、件の金を二つにわかち、廿五金は蘆月が菩提へ布施して、祠堂料に是を賜し、又廿五金は、鍬介諸平と呼ばれて年來一角に使はれたる、兩個の奴隷に取らし給ひぬ。この奴隷ども身に露ばかりも過失なけれど、忽地に主に後れて、進退難義に及べるよし聞えしかば、牧村衞門これを憐み、かくの如くはからひけり。さてかの諸平が母は、一角が乳母なりければ、主家に舊緣あるものなるが、二親ははやなくなりて、その舊里は當國なる、不破の白木と聞えたり。

又鍱介は下總なる、許我の手口のものにして、故郷には妻あり子あり、近屬身上不如意になりて、債を贖ふ便着なければ、所縁を求めて美濃路に赴き、一角に使はれて、僅に二年になりつ。かゝりしかば件の諸平は、今守より給はる金の、われと鍱介とおなじ數なるを見て歡ばず、われも等しき下郎なれども、一角刀禰の乳兄弟なれば、主家に由縁淺からず。しかるに、一季半年の鍱介と高下もなく、これらの金を給はること、公ならずと思へども、守の賜をとかく申さんも恐ければ、足らずながらも二つに分てる、十二金餘を腰に著けて、是彼齊しく蘆月が宿所を立退き、稻葉山より一里に足らぬ、河手村のほとりまで來にけり。道次に一軒の酒店ありしかば、鍱介諸平等はこゝに兩三碗の茶蠻漉を酌みて、別離の情を述べ、これより袂をわかたんとて、なほ二

三町諸共にゆく程に、と見れば二人獵夫と覺しきが、小松林の芝生にて、打ちつ拳れつ挑めるあり。鍱介は人となり惻憱の心あるものなれば、この光景を見過ぐすに得堪へず、走り蒐つて一人を抱留むるに、諸平も已むことを得ず、その一人を引止め、緣故を尋ぬれば、一個の獵夫聲を振り立て、旅客たちのしることならねど、聞かんとならば聞き給へ、われは復市と呼ばれ、彼は株藏と呼ばれて、我も彼も加〻島山の麓に居り、けふはさせる獲物のなくて、腹立しさにうち連れ立ち、里に出て小半升の片白に醉を催し、われまづこの叢へ來て一隻の、兎を早くも駈出せしに、這奴は後れて來るときに、折よくこれを打止めたり。しかれどもこの兎を、駈出せしは我なれば、と云はせもあへず株藏は、眼を睜り足踏鳴らし、執念くもいふ奴かな、汝も鳥銃は持ち

つらんに、駈出してなどて撃たざる、われ撃止めてわが取る兎を、汝に指だもさゝせんや。と迭にいきまき罵る聲の、いたく酔ひたりと見えて舌もまはらず、吻く息は鼻を穿つて、酬の柿の匂ひしたり。鍱介諸平はこれを寛めて、さま〴〵に拵ゆれど、酔たるものゝ癖なれば、同じことのみ繰り返して、綽果つべうもあらざれば、鍱介霎時尋思して、一隻の兎に兩個の主あり、孰をいづれとわきがたし。所詮この兎をわれらに賣りて、價を二つにわかち取らば、迭に恨はなかるべし。といへば復市株藏は、つく〴〵と聞きてうち點頭き、この裁判は說得て理あり、かくまでに云はるれば、ともかくもと和睦して、兎の價を百文に定め、則ち錢を分ちとりて、鍱介等に歡び聞え、株藏は又渉獵んとて、陀の方へ走り去り、復市は家路なる、加〻島を望て立ちかへ

るに、此男殊更に酔ひたりけん、只踉〻蹌〻として、一歩は高く一歩は低く、背影の木がくるゝまで、兩三遍跌きけり。當下鍱介は、件の兎を引提げつゝ、迥に復市を目送りて、呵〻とうち笑ひ、さても要なき物を買ひぬ。さはれわが子鍱松は、いまだ疱瘡をせざるものなり、皮をば故郷へ家裏にして、肉は今宵の宿りにて、羹にせばやと思へど、今はやこゝにて別れなば、これを和主に饗はで、遺憾きことなり。と云ふに諸平はうち微笑み、實にもわれは果報なし、しからばこゝにて別れんとて、鍱介は東を望して鵜沼沓掛の方へ赴き、諸平は道の程遠からぬ、不破の白木へ歸るなればこゝにて別れつゝ、又つく〴〵と思ふやう、今彼の金を悉くわが有にする時は、生涯はおくり易し、鍱介何等の勤功ありて、われに等しく賜を、二つにわけて得たりしぞや。



と人を怨めば今更に、媚き事限りなく奪ひ取らばやと思ふ、悪心頻りに萌しつゝ、背後を佶と見かへれば、まだ鍱介は遠くも得ゆかず、折ふし往來の人も迹絶えて、彼獵人が遺れたりけん、一挺の鳥銃のみ、叢の中にあり。これ究竟の物なりとて、搔取り見れば火縄も滅えず、兩丸をこめたれば、遽しく身を固め、且く築て撞と發せば、窺ひ錯はず鍱介が、背を胸へ打拔いたり。憐むべし鍱介は、一聲苦と叫びもあへ

す、仰さまに倒れつゝ、煙の中に息絶えけり。諸平は鳥銃憂哩と投棄て、飛が如くに走り寄りつゝ、撃仆したる鍱介が、懐を搔撈りて、件の金を引出し、莞爾と笑みておし戴き、人もや來ると茅繁き間道のかたへ走りつゝ、舊里をさして歸りしを、しるもの絶えてなかりけり。さる程に獵夫復市は、旅客等に寛められて、加〻島へ歸る程に、酒の醉ます〳〵上りて、いくばくも走り得ず、六七町西のかたなる、田の畔に倒れつゝ、半晌あまり熟睡して、絶えて善惡をしらざりける。時に夥の莊客們、連枷長柄の

鎌などを引提げて、動搖〳〵と索条つ。人殺しはこゝにをり、打てや括れやと罵りて、矢庭に索を被しかば、復市はこれに驚かされて、酒の醉忽地醒め、われ露ばかりの罪もなし、縛の趣をよくも知らさで、などてやいたく縛めたる、まづこの索を釋かずや。と咽ふり絞りて叫ぶにぞ、莊客們冷笑ひ、なでふ汝に罪なからん、この南なる芝生にて、撃殺されたる旅客あり。傍に獵の兎あり、其處より又十反あまり西の方なる叢中に、加〳〵島山の復市と、漆もて寫したる鳥銃を拾て

あり。彼旅客が撃れたるやうを見るに、鳥銃痕に疑ひなし、これらによりて初めより、人を殺せし癖者を、汝なりとはみな知つたり。犯人を走らしては俺們も後難脫れず、物な云はせぞ、引立よと、異口同音に罵りて村長許將てゆきぬ。しかれども復市は、思ひがけなきことなれば、今なほ夢の心持して、つく〴〵と案ずるに曩にわれ旅客等に寛められ、株藏と和睦して、獲の兎を賣りしとき、いたく醉たればその處へ鳥銃を遺れつゝ、宿所へは得も歸らで、道路に臥したるなり。

遮莫、身にとりて罪なきに、なでふおそるゝことあらん、と只願に氣を激し、村長許赴きて、事の趣を演ると雖も、鳥銃に寫したる、その名に紛れなきをもて、赦さるべうもあらず。村長は又株藏を召しよして、縡の顚末を尋ぬるに、某はその處より、復市に引別れ、山獵して候へば、後の事はしらずといふ。是さへに不審ければ、次の日村長は、國主へ訴へ申さんとて、復市を引かし、株藏を將て、稻葉山へ赴くと聞えしかば、復市が女房間柴は、今茲僅に五つなる、一子岐太郎が手を引きて、天に叫び、地に叫び、加〻島より走り來つ。群立つ人をかきわきて、今牽れゆく良人の索に携り著きつゝよゝと泣けば、岐太郎も又よゝと泣き、父さまなどて縛られ給ひし、再ねてわるさ爲給ふな、御免〻〻を早やし給へ。といふ舌は未だまはらねど、背へ引ぞ

まはされし、親の縲絏を勸解る子の、しらぬ哀れはなほ悲しくて、父は更なり母親は、張や裂けなん胸苦しさに、涙はいとど滿潮の、何時を知死期と思ひやる、歎きの數〻堪へかねて、親子三人が諸共に、聲振り立て泣きにけり。且くして女房間柴は、やうやくに目を押拭ひ、世わたりなれば殺生を、事とはすれど慾に耽り、利に誘はれて人を殺す、夫にはあらざるに、などてかう阿容〻〻と、身のあかしをば立て給はで、暗き獄舍へ牽かれ給ふ。昨日おん身に事ありて、捕はれ給ふと聞えしより、いとゞ痞に血暈に、堪へずはあれど大荏土の便に豫て貯への、あひ藥なる神女湯の、手にだにとらぬ藥鍋、尻も据らで立ちつ居つ。おき所なき物思ひ、時夕通宵泣明し、曉ては外の足音も、ゆるされて歸り給ひしか。と立出て見れば生憎に、心にかゝる鵜鳴き、

咎なき鳥を憎みつゝ、待つにかひなく今こゝで、親子夫婦の辭別、三人面をあはしても、歎きはいとゞます鏡、曇りなき身も面り、いひとく由は侍らずや。とかき口說かれて復市も、禁めんとすれどはふり落つる、涙に面をふり背け、間柴よ、さのみ、いたくな泣きぞ。犯せし科は一點なけれど、醉て遺れし鳥銃は、これ禍の種子島、活業とは云へこの年來、數限りなき殺生の報にやあらんずらん。今茲はしかも四十二の、厄負とこそ思ふなれ、さりとて人を殺さねば、われ又命とられんや。しばしが程ぞ岐太郎も、大人しう留守せよと、いふ間も時や移らんとて、引きたてらるゝ縛の、索にもつるゝ恩愛の、絆苦しき生別れ、喃情なし今霎時、いふことあり。と留めあへず、地上に礫と轉輾び、號哭ぶ妻と子を、共に見かへる衆人も、各袂を濡しけり。さ

る程に稻葉山には、河手の長が訴へによりて、牧村衞門長晴、まづ擊れたる旅客の亡骸を展檢みるに、蘆月一角が舊の奴隷鰈介に紛れなし。渠はその主に後れて、此度下總なる、舊里へ歸るものなり。しかも懷中には、守より賜つたる金夥、必定あるべきことなるに、その金なきは訝しとて、復市株藏等を鞫問するに、彼鳥銃の事、定かならず、よりて兩個の獪夫は、そがまゝ獄舍に繫るゝ程に、復市は暴に病わづらひつゝ、只三日にして身まかりけり。一人既に病死せしかば、再度の糺明に及ばれず、株藏はゆるされて、加ふ島へかへりしとぞ。

卷之二

不破の關

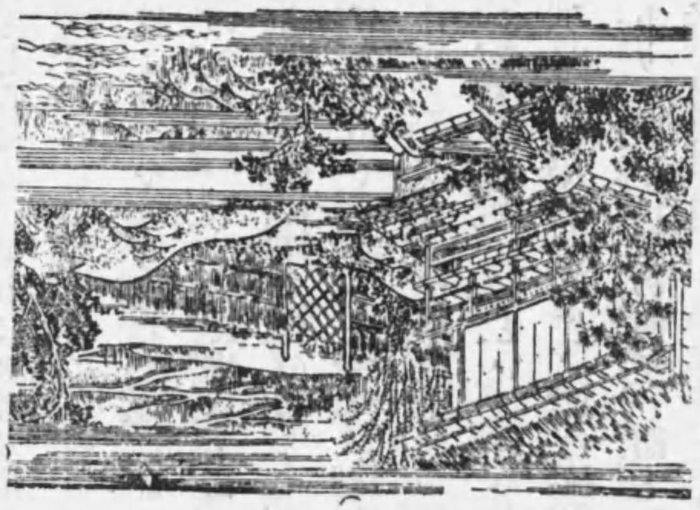
不破の關は、美濃國不破の郡にありしかば、やがてぞ關の名に呼びたる。この關天武天皇の白鳳二年に立てられて、東山道の扞城なれども、後にはいたく荒たるにや、歌にはをさ〳〵照る月の板庇を漏るよしを詠めり。頽廢既に年ふりて、今その蹟は定かならねど、關が原、大關村、關の藤川、小川なんど關をかけて名に呼ぶ里は、みな彼關の餘波なり。されば尾花才作が、住居をこゝにトたるは、關の小川の東にして、關が原へ遠からず、又蘆月一角の奴隷諸平が舊里は、關の小川の西にして、白木と唱ふる瘦村なり。却說諸平は去ぬる比、合渡林の芝

生にて鍖介を擊殺し、彼が守より賜りたる、金を輙く奪ひ取りて、わが金と合すれば、二十五金の本錢を獲たり。人にしられじと思へば問道より、七里が程を直と走りて、白木村へ歸りつゝ、里の戸毎に打めぐりて、別し後の恙なさを祝し祝され、此度おもはず主におくれて、俄頃に故郷へかへりし事、守より金を賜したる緣由さへ告知らし、守る人もなきわが宿を、かき拂ひつゝ膝を容るゝに、曩に二親身まかりて、果敢なくしき親族はなけれど、田舍人の憑しくて、訊おとづるゝもの多かり。さはれ諸平は人なみなる、田園をもたらぬに、生活の便着には何を欲得と思ひはかるに、この處は、美濃の尾山へ程近くて、木を伐出すに便宜なれば、件の金をもて一座の檜山を購めつゝ、喚聲といふ妻を娶りて、ともかくもして世を渡るに、女房喚聲は嫁ぎたる

その月より有身て、次の年の五月五日、良人に晝餉を饋るとて、因果塚のほとりを過るに、まだ十月には滿たざるに、この時猛に產の氣つきて、宿所へは得もかへらず、件の塚を產室にして、女子をうみたりける。繈をはる比良人諸平は、折もよくこゝへ來て、且つ驚き且つ歡びて介抱し、われに齊しく山掙する、樵夫等を呼集合、これを相譚ひつゝ、女房を篋に舁し、兒を懷にして宿所へ歸るに、八月子なれど健にて、その面影は親に肖ず、目鼻だち愛たくて、膚いと淸やかなれど、如何なる故にや右の拳を楚と握りて、とかくすれども絕えて披かず。心にかゝるは是のみならで、女房喚聲はとにかくに、臨產の疲勞肥だゝず、病むこと百日ばかりにして、終に空しくなりにけり。されば古より、五月五日に生るゝ子は、必ず家に祟るとて、漢人も諱むものあり

しが、天文の比までは、わが邦にも又この事あり。殊に白木の一村は、ことを諱むこと甚しく、富めるものはその子をもて、假に他人に養はせ、或は異姓を冒せなどし、貧しきものはしのび〳〵に、その子を棄ること又多かり。諸平は女兒が誕生日の、世に忌む端午の節なれば、彼はや母にや祟りけんと思ふにいとゞ怪しきは生れしより日ごろ經たれど、右の拳を披くことなし。そはせん術もなき物から、母のなき嬰兒を、いかにして孕むべき、いと不便にはあなれども、久後さへも憑しからず、餓ゑて死ぬるを俟んより、棄てばやと思ひ決めて、一夕嬰兒を懷に抱きつゝ、彼此を徘徊するに、村落は富家罕にて、われに等しきものゝみなれば、棄つる子にだも門を擇む、流石に親の情にて、是首にやせまし、彼首にや、と迷ふ心をとゞめあへぬ、大關村に藪は

あれど、爰にすら棄てかねて遥に關の小川なる、堺橋をうち渡り、なくなく子をしば〳〵搖揚げつ、敲きつけても野千玉の、夜の川波いと寒き、浮世の秋の初風に、招くともなきしの薄、尾花が門に來たりけり。當下諸平はつく〴〵と、才作が檐を瞻仰て、忽地に思ふやう、この處は豫て聞く、わが故主の同僚なりし、尾花氏の新宅なり。彼人は殊更に、守のおん覺えも愛かりしに、いかなる故にや退



糧して、閑居の人となり給へど、第一の出頭なる、牧村ぬしの婿なれば、今こそあれ後〳〵は、召返され給ふなるべし。それ迄に至らずして、生涯かくてあればとて、衣食に事缺く人にはあらず。男兒ひとりありとか聞けば、女子はめづらかならん、彼此と擇まんより、女兒が爲に庇蔭を憑むは、この人にますものなし。と思ひ決めし惡因緣、母が乳をもて護育て、おのが爲にと故主なる、一角が

仇としらねば、果敢なき事も頼まれて、背負來たりし準備の春を、密かに釋おろし、なく音にや疲勞けん、よく睡りたる嬰兒を、驚かさじと懷より、やをら出して春に盛り、檐の桷に掛けて見る、わが子ながらの釣垣衣、しのぶに堪へずふり沃ぐ、親は泪の打水に、濡らす袂のうら寒き、曉の風八聲の鷄と、共にしばなく嬰兒を、思ひ捨てぞかへりける。かくて諸平は四月が程に、妻を喪ひ子を棄て、憂をやるせはなけれども、女兒が事を人問ふ毎に、明白には告げがたくて、彼は物怪の幸ひに、養はんといふ者ありて、近江の方へ遣はしたり。と云ひくろめても人はしれど、里の流俗なればこれを咎めず、又媒妁するものあり。諸平はその明年、囮といふ後妻を娶りてより、三年といふ春の比、男兒を産せにければ、これを諸太郎と名づけたり。しかるにそ

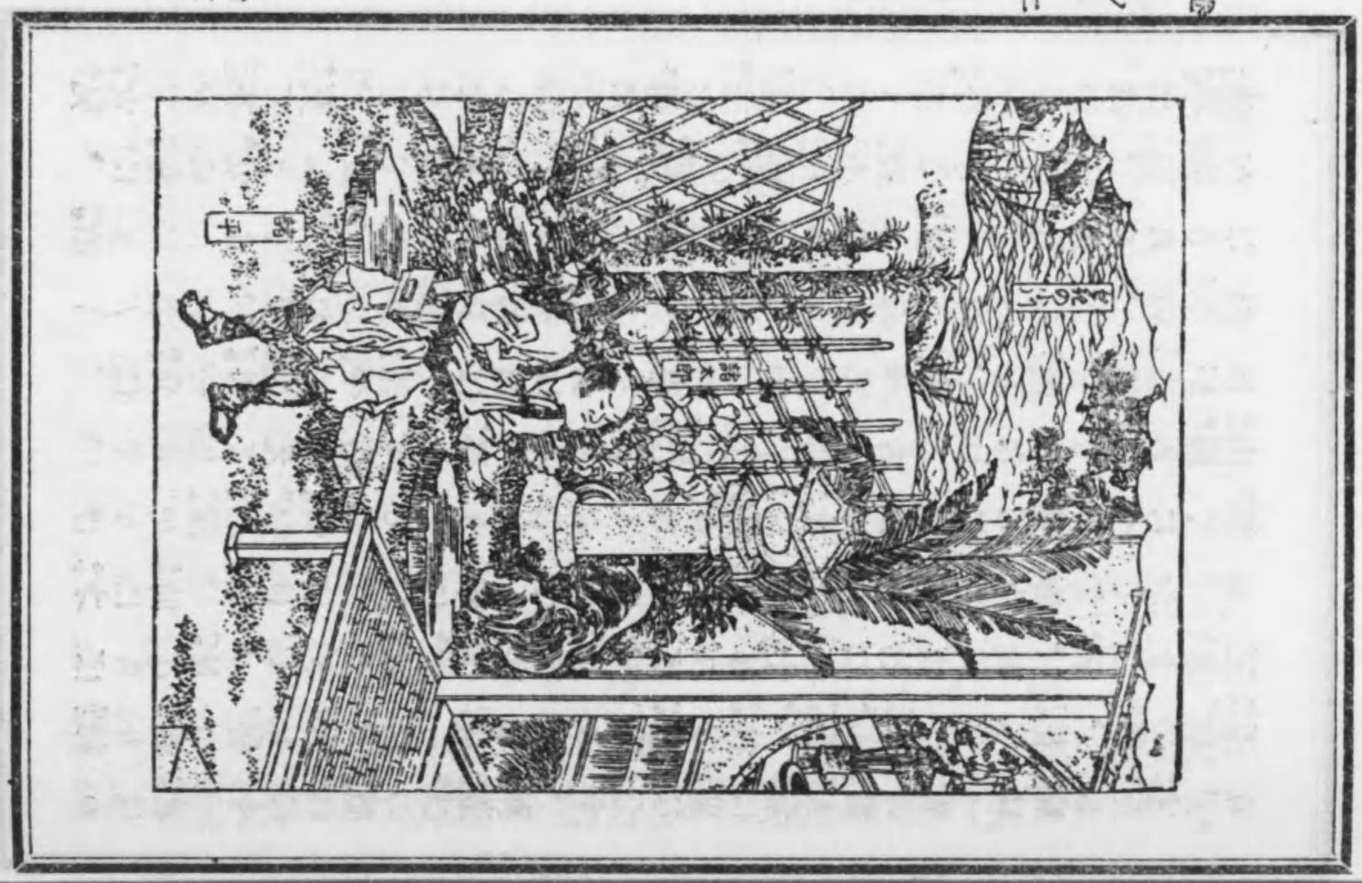
の年の雷鳴月に、山洪水いたく出て、白木の一村大方は、屋の腰を洗はれたれども、命危きことはなきに、諸平が宿所は山をうけて、殊に低き處なれば、いかでかは脱るべき。子を逆さまにかき抱き、夫婦篠山に逃登りつ、辛くして恙なけれど、家は蹟なく流されしかば、物一つ殘るべうもあらず、稲葉山より歸りし比、二十五金の本錢あり。此彼に用ひにけれど、なほ十二金餘の貯祿ありしを、これさへにおし流され、木傳ふ猿の枝を失ひ、澤渡る蟹の穴を毀られたる心地しつ、進退こゝに究りぬ。輪廻應報の理、かうあるべき事ながら、足ることしらぬ心より、曩に鍬介を撃殺して、奪ひ取りたる金の數、そがまゝ此度失ひしは、執着のなすところ歟、こは平事にあらざりけり。と心づきてはなか〳〵に、むかし悔しく思へども、今さらに術なきものから、

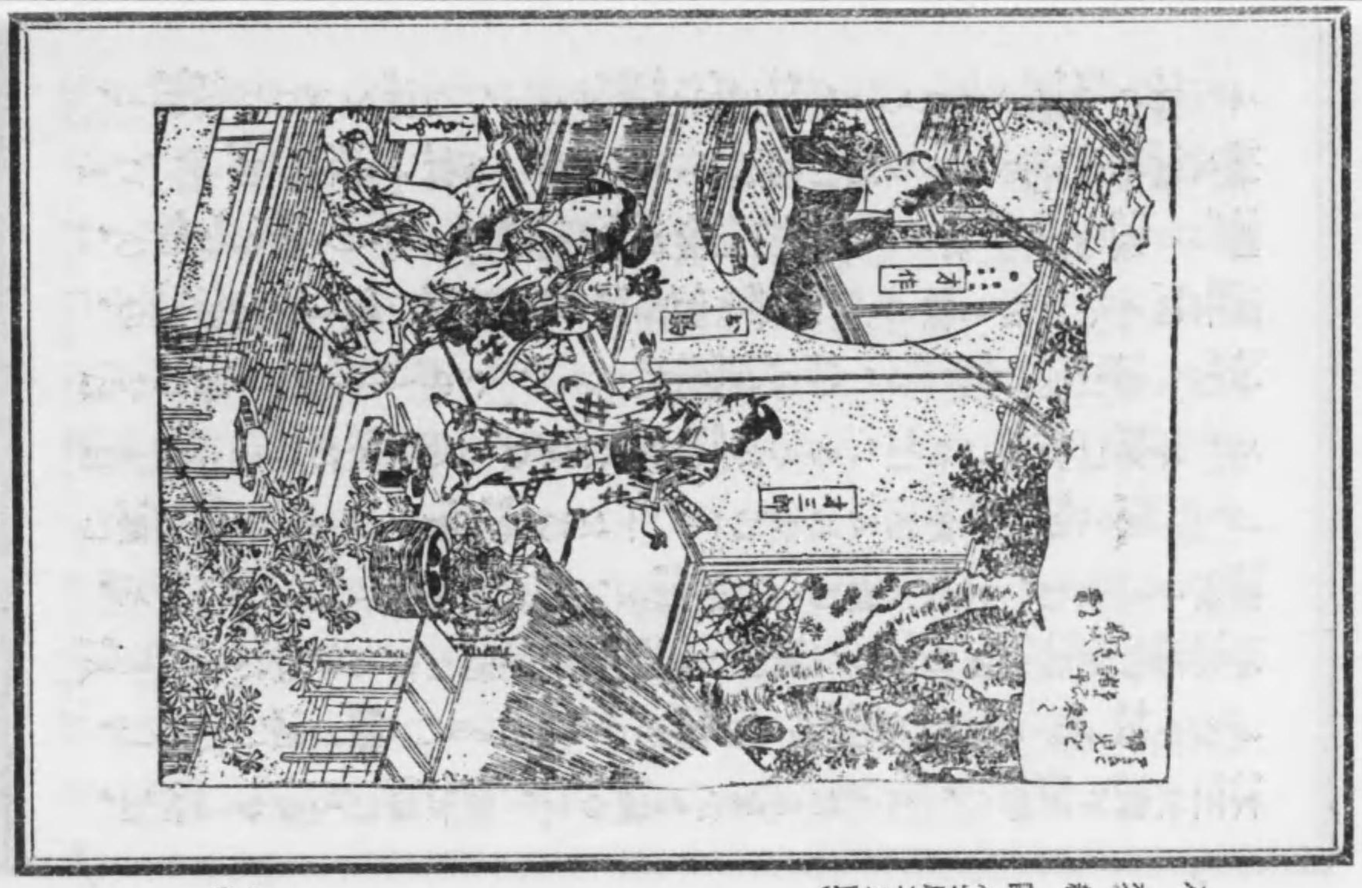
是より心弱くなりて、木を伐り草を刈りつゝも、口に念佛は唱せども、貪るこゝろ休むにしもあらず。とかくしてありし處に、形ばかりなる白屋を締びかけて、僅に月日を送る程に、次の年の夏の比、女房囲は馬に柴を負はするとて、膝頭を蹈挫かれ、剩へ、肩骨を蹂躙れて、是より生涯半身遂はず、此彼の療用にいよ〳〵生活の便着を失ひ、衣食の綱と憑みつる、檜山も人に售りて、心と共にいと細き、本錢とていくばくもあらねば、人の爲に枝を折り、或は一駄の薪を脊負ひて、關の小川を西東へ、今須の驛、野上の里、垂井藍川のほとりまで、日毎にこれを賣り歩くに、留守する妻は癈人なり、起居も夫の翼けによる、石佛に等しきものに、稚兒をうちまかせんは、いとゞ便なき所爲なれば、薪の上に刺衣を布きて、今玆わづかに二つなる、諸太郎を括りの

ぼして、生活に出しかば、その故を問ひその事を聞く、人みなこれを憐みて、薪を買ふものいと多かり。諸平はこゝに思はずも、稚兒が本錢になりて、辛き世ながら鹽竈の、浦ならなくに朝夕の、煙の價を獲たりけり。是より先尾花才作は、思ひもかけずわが門へ、嬰兒を捨てられて、うちもおかれずその曉に、取り入れて見れば女子なり、生れてより三四ヶ月、百日あまりになりもやせん、乳貌のいと愛たくて、膚は玉を延べたるごとし。何ものかかゝる兒を、心強くも棄てたりけん、あな痛まし。と正首に、夫婦手を据ゑ膝に置き、ふかく愍む心より、養育せばやと思ふにぞ、この時一子才三郎は、はや四歳になりぬれど、小桔梗が乳のまだ涸れねば、養ふになほ便りあり。この子がこゝに棄てられたるも、脱れぬ因緣なるべしとて、詰朝繹の赴を、里正

に告知らして、明白に養ひ取りつ。是が棄てられたる時に、浬色なる夾衣の、裾に牧駒を染めたるを、只一つ着たりしかば、その名をやがてお駒と呼びて、足らずながらも小桔梗が、乳をもてこれを孚む程に、思ひの外によく肥だちて、いと愛〻しくなりにけれど、いかなる故に、や右の手を、握れる隨にて披くことなし。これ故にこそ棄られけんと、思へば不便いやまして、ありとあるべき醫療を竭し、或は神佛へ立願して、祈れども驗はなくて、五年あまりを經る程に、掌こそ人なみならね、容止ます〳〵愛敬づきて、心だに怜悧見ゆれば、恩愛實の子に等しく、才作夫婦は挿頭の花、掌中の珠と慈愛み、とにもかくにもお駒が右手の披くよしだにあらんには、生育つ後に才三郎が、婦ともなさば劣らず勝らず、いと似つかはしき夫婦ならんと、その事をのみ希

ふ。親の心はしらねども、才三郎は幼きより、お駒をおのが友垣と、結ぶ縁をはじめより、迭に蟲がしらせてや、お駒も亦才三郎と、いと睦じく遊びけり。かゝりし程に白木なる、諸斗はをり〳〵薪を脊負ひ、諸太郎さへにかき乘して、尾花が門を過るにぞ、曩に棄てたる前妻の、女兒が事は深く匿して、今の女房囲にすら、つや〳〵告げも知らせねど、年來になりしかば、さぞな大きくなりぬらん、外ながらも見まほし。と思ふ折から呼び入れられて、一たび薪を賣りしより、價も殊に廉かりしかば、才作夫婦はこの柴賣を、いかでお駒が親としるべき、年來妻の難病に困じ果て、穉兒を携へて、生活に來るものなり。と人もいひ彼もいへば、いと痛ましく思ひつゝ、をり〳〵物を食しなどし、才三お駒が玩物の、ふりたるをかき集めて、諸太郎にとらせしかば、





八　大　海　図（さがみ川図）

諸平ははからず今こゝに、花主を得たるのみならで、棄て花やぐ女兒が面影、雪の中なる姫小松、霜の朝の瞿粟に、まして愛たき女の童に、なりぬるかな、と思ふのみ。その事とてはわが口を、開くよしなき右の手の、人なみならぬをうち歎く、才作夫婦を慰めかねて、いよ〳〵わが素性を匿し、すべてむかしの事を云はねば、諸平は蘆月一角に、由縁あるものなれども、才作も小桔梗も、その事をすら絶えてしらず、聞くにつけ見るにつけ、世に薄命なるものなりとて、憐む心深かりけり。かくて春立ち年暮れて、天文もはや十一年になりにけり。時に才三郎十二歳、お駒はその年十なれば、此彼共に愛敬づきて、月ならば五日の影、花ならば梢の莟、後の色香もおし量られ、人も譽め親も訪る、才三お駒は一對の雛人形に異ならず。稚遊びの戯れにも、君はわが伏よ、わが娘よとて、誰誨えねど高安の、面影うつす筒井筒、ふかき緣と思ひ汲む、二親は豫てより、玉の罐に金の綆、只そのまゝに結びそえて、末は一つになさばやと、思ふにつけてまかせぬものは、お駒が右の拳なり。世に支指といふものあり、又龜手などいふものあれど、そは生得し跛人なり。お駒が拳はさる類にあらず、人なみなみに生れ得て、握りたる手の披かざることやはある。と才作は、醫師に問ひ、奇藥を索め、年來心を殫したる、その驗はなけれども、なほ思ひ捨てがたくて、有一日小桔梗に對ひていふやう、大約兒の生れてより、その手を披くことなきには、數百年を歷る、墳の壤をもて洗ふときは、立地に效ありと、唐山の書籍にも記し、わが國俗もいふことなるを、忘れたるこそ疎なれ。さは覺つかなき所爲ながら、既にこの奇病あれ

ば、その方なしとも云ひがたし、幸なるかな當國には、美濃の尾山の古墳あり。道の程も遠からねば、翌はつとめて彼處に赴き、彼塚の壤を取りて、その效驗を試みなん、割籠の準備し給へ。といへば小桔梗沈吟じ、そはさるよしも侍るべけれど、因果塚は古より、塚の鬼の祟ありとて、詣づる人もなき由を、豫てより聞きて侍り。さればにや彼墳の、祈子なりとか聞えたる、蘆月氏は家も絶えたり。又そのはじめ角六の、執し申せしことありて、墳を崇め寺を建てんと、守のおん沙汰ありしころ、わが父これを諫めまいらせ、その事止みぬと稗き頃、母の物語りに聞けることあり。させる魔所にはあらずとも、斧もならぬ深山路に、惡靈いまだ靜り得ず、と人もいふなる古墳へ、近づき給ふはいと危し、みづから深念し給へ。といふを聞きあへず才作は、呵々とうち笑ひ、奇を好むは俗の常情、樵夫牧童等が首尾整はぬ、怪談に聞懼して、よしなきことを宣ふかな、おん身は是武士の女兒、武士の妻にはをはさずや。件の尾山は樹木ふかくも、里を去ること遠からず、或は美濃の中山と唱へつゝ、鷄壠の山に隣りて、杣山兒は一日も下上せざることなし。晴たる日にはこゝよりも、眼前に見ゆるものを、なでふ恐るゝことあらん、心やすく思ひ給へ。といふに再び諫めかねて、甲夜より割籠を調ふれば、才作は詰旦、八聲の鷄と諸共に起出て、身かろく打扮ち、腰に兩口の刀を横へ、手に一挺の鍬を引提げ、笠ふかく戴きつゝ、堺橋より北を望て、野を越え里を過りつゝ、屠些し傾く頃、美濃の尾山へ攀登るに、時は今、十月の初旬にて、きのふの時雨霽れながら、苔滑に露深けて、動すれば杖を辷らし、面をうつ山

風は、殊更に冷かなれども、背にはなほ汗を流し、仰上れば青壁、刀もて削れるごとく、直下せば黄葉、梭をもて織るに似たり。登ること數町にして、墳のほとりに來て見れば、一杯の土饅頭、累〻として狐兎荒草の裡にかくれ、蕭〻たる白楊いく度か枯れて、苟なほ青塚を覆ふに足る、時に寒煙前溪を埋め、山氣丘壠を掩ふ、悲いかな生と死と、貴賤百歳の人なく、北邙千秋の墓あり。この墳なくばいかにして、柏芒寺の蹟をしるべき、この墳なくばいかにして後の奸淫を懲らすべき、因果の道理眼前、汚れたる名は埋れず、いと淺ましきことなり。と獨語ちつゝ古墳の前に立ち後に繞り、引提げし鍬を杖にして、思はず嗟嘆じたりけり。かくてあるべきに非ざれば、あや〳〵と墳に登りて、拿つたる鍬を取直し、再び三たび掘起す、壤諸共に墳動き、俄頃に山

鳴り風暴れて、砂を飛し樹を倒し、物凄じき光景に、才作は且つ怪み、且つ驚きて、思はずも拿つたる鍬を憂哩と捐て、衝いたる膝を立直して、走り下んとする程に、矧然として石碎け、塌然として墳崩れ、身も忽然と陷りて、土中に入ること一丈あまり、隧〻たる穸に、落ちて黑白は別ねども、幸ひにして恙なし。疾く出ばやと悶掻ども取り著べき木の根もなく、足を掛くべき礁もなし。人跡絶えたる深山路に、人を呼ぶとも孰かは來べき、只この儘にあらんには、綆の斷離し罐に等しく、彌勒の出世にあふまでも、人揚げざれば出でがたし。こは如何にせん、とばかりに千〻に心を苦むれど、後悔こゝに立つよしもなく、命運の竭る所、只手を束ねて死を俟つのみ、又せんすべもなかりけり。浩處に穸の中、泗〻として膚を浸し、啾〻として物の聲あり。

才作ます〳〵心驚き、刀の鞘を握り持ちて、つく〴〵と透し見るに、いと暗かりし坎の中、忽地霧の晴るゝが如く、と見れば左手に土蜘蛛あり、右手には青草蛇あり、その狀凡常ならず。毒蛇は眼角にして、鱗の光晃〻と、月を載せたる波の如く、蜘蛛はその肚凹く、繰出す網は黑くして墨を吐く烏賊に似たり。此彼右より左より眼を怒らし、舌を吐きて、才作に飛び蒐り、足を卷とめ、手に蚕縁、氣を吹き網を繰掛けて、刺殺さんとしたりしかば、刃を拔くに遑なく、才作は右手をもて蛇の腮を楚と捉り、左手にまつはる蜘蛛の眞中、小腋に締めて動かせず。思はずも聲を揚げ、嘘き叫ぶ折こそあれ、諸平はこの日人に傭れ、木を伐らんとて只一人、尾山の奥へ分け入りたるに、山の神の暴るゝと覺しく、何處とはなく震動して、梢を拂ふ風さへに、いと怖しき光景なれば、やがて斧をおさめつゝ、本意なく山を下るとて、塚のほとりに來て見れば、怪しむべし數百年、白骨黃土に埋れて、趾のみ遺す古墳は、發けるごとく陷りて、龍蛇の穴に異ならず。只何となく毛骨竦て、おそる〳〵さし覗けば、坎の中に人落ちて、物と挑みあらそふにや、嘘き叫ぶ聲甚し。こはそも如何に、とます〳〵怪しみ、とさまかうさまさし覗けども、底ふかくして黑白をわかず、緣由こそ定かならね、人ありて穿へ墜ちたるに疑ひなし。救ひ出して緣故を、聞かばやと思ひしかば、上よりしば〳〵呼びかけて、こゝに人あるよしをしらせ、腰に着けたる釣索を、坎の中へ手繰おろしつ、とくこの索に取り着き給へ、取り着きたまへと叫べども、才作は左右の手に、毒蛇と蜘蛛を支えつゝ、十の指にいとまなければ、援くる人のありと

才作

諸平

しれ共、索に取り着くことかなはず、諸平は頻りに焦燥て、嗟夫もどかしやと吱きつゝ、心なく引く釣索を、程もよく才作が、帶の結目へ引きかけたり。さればこそとて力を極め、倒れたる樹に卷きよせて、漸〻に引く程に、才作は身に傷かず、毒蛇と蜘蛛と左右の腋に、楚と抱き止めたる儘、穿を出たれども、忽地に息絶えしかば、諸平は慌忙きて、呼び活けんとてその人を、はじめて見れば思ひがけなき、おのが花主の尾花氏なり。こは〳〵いかに、と再び驚き、石滂を掬びて顏に吹きかけ、さま〴〵に勦るにぞ、才作は漸くに、われにかへりて思はずも、太やかなる息を入、救ひし人を見かへるに、豫て相識れる柴賣なれば、その欣びも一しほまして、感涙を拭ひあへず。抑和主はいかにして、わが穿へ墜ちたるを、早くもしりて助け給ひし、こは再生

の恩惠にこそ。といふに諸平は形を改め、訝り給ふはことわりなり、けふは人に傭はれて、この山の木を伐る程に、俄項に風暴れ地震りて、須臾も堪へがたければ、やがて山を下るとて、こゝへ來てはからずも、花主を救ひまゐらせたり。おん身は亦何等の故に、この穿へ墜ち給ひし、心得がたく候と問はれて尾花は今更に、縡の趣匿みがたくて、お駒が爲に古墳の壞を取りに來つる事、且つ墳の崩し事、毒蛇土蜘蛛の事さへに、首尾を說しらすれば、諸平は頻りに驚嘆し、原來この人、お駒が右手の龜めるに、醫療を盡せど殫し倦かず、深山に分け入り靈ある墳と、しりつゝもこれを犯して、身を殺さんとしつるなり。人わが女兒の爲にすれば、われ又はからずこれを助く、實に不思議の因緣なり。とこゝろに思へど、口には得云はず、數回才作が、恙なきを祝

しつゝ、さてもその毒蟲を、いかにして脱れて、物さへ被ぎて出で給ひし。と眉うち顰めて問はるゝにぞ、才作これに心づきて、猛に左右を見かへるに、蜘蛛と毒蛇はあらずして、周一尺四五寸なる、いとふりたる硯あり。又數貫文の古錢あり。硯はその形圓くして、眞中些細りたり。錢は皆いたく錆びて、緑青に文字を埋め、緡はすべて朽果たれども、錆び固りて繋げるごとし。才作はこれを見て、小膝を拍ちて驚嘆し、硯はむかし行平の嬖妾に給はりし、稲葉山とて世に名たゝる、柏芒寺の什物なるべし。傳へ聞く、柏芒寺の午句坊、不破の孀婦、谷折とやらんに姦通し、その子木二郎を殺せしかば、谷折もやがて自害せり。破戒無慚の惡僧も、その哀みに得堪へずして、母子の死骸を池に沈め、なほ愛惜にや堪へざりけん、稲葉山の硯を取りて、池水に投

入れつゝ、錢八貫百文ありしを、悉く腰に着け、おなじ水底へ沈みしかば、麓の里人祟をおそれ、池を埋め塚を築き、因果の名さへ負はせしより、今に至つて數百年、古蹟をこゝに遺せしに、一朝にして墳崩れ、硯と錢と人間に、再び出づるも天數ならん。かゝれば惡靈消散して、今より障礙あるべからず、されば又、硯と錢と久しく土中に埋れて、その精蜘蛛の形と見え、毒蛇の形に見えたるのみ。これにて思ひ合するに、この硯は圓くして、その腹殊に脹大なれば、蜘蛛の形に見えたるなり。又この錢の錆着きて、長やかに連りたれば、青草蛇に見えけんかし、かゝれば事みな因あり果あり、怪しきに似て怪しむに足らず、いでや硯を洗ふて見ん。といふに諸平はやうやく曉りて、いよ〳〵奇異のおもひしつ。軈て石滂を掬びかけて、件の硯を洗はすれば、果

して背に文字顯はれ、立わかれ、いな葉の山の峯におふる、まつとし聞かば、今かへり來ん。行平。と鐫りつけたる。鮮やかに讀まれしかば、原來疑ひなきものなりとて、才作これを袖に載して、愛玩すること大方ならねど、諸平が硯に意をとめず、件の錢を打剝し、うち剝しつゝ數ふれば、その數八貫百文あり。才作は又これを見て、和主折よくこゝに來て、われを救ふにあらざりせば、わが骨はこの穿に、朽ちて因果の名をますべし。再生の恩あまりあれども、當座には酬ひがたし、われは硯を愛するのみ、この錢は悉く和主とりて朝夕の煙の價に し給へ。と云はれて諸平は忽地に、溢るゝばかり笑み傾け、わが爲には大かたならぬ、花主にてをはするに、かばかりの事したればとて、いかで酬ひを求むべき、この錢も辛くして被ぎ揚げ給ひしに、悉く某

に、給はればとてやは受けん、せめて半を留め給へ。といへば才作頭を掉り、われは閑居の身なれども、衣食には物も缺かず、和主は妻の長き病氣、稚兒さへにあるなれば、艱苦もさこそと思ひやる、謙退辭讓は人によるべし。但この墳の崩し事、わが墮ちたることさへに、人もし知らば奇を傳へて、浮說怪談喋〻して、わが名立てられんはうるさかるべし。われから發きしことならねば、人に告げもあらばありなん、こゝろ得給へ。と信だちて、說き諭せばうち點頭き、宣ふ所その理あり、云はぬは云ふにますものを、孰にかはしらすべき、しからば命にしたがひて、これ給はらん。と應へつゝ、上なる單の刺衣を脫ぎて、件の錢をおし畏み、鈎索かけて肩に戴れば、才作は稻葉山の硯と塚の塊を、袱に包みて腰に着け、もろ共に麓へ下りて、こゝより左右

に立ちわかれ、才作は關の小川へ、諸平は白木へかへりけり。さる程に、因果塚猛に崩て、その跡穴になりぬとて、麓より里に傳へて、彼此に風聞し、これを見んとて山に登る、人いくばくといふを知らず、只管驚きあやしむのみ、その故をしるものなければ、鄙語にいふ七十五日、件の噂ははや止みて、見にゆく者はなくなりにけれど、尾山の軸は昔より、近郷の茶毘所なれば、牛句坊が窆とて、その名はますます高くなりぬ。

不破の關の下

尾花才作は、その夜さり、恙なく宿所へかへりて、小桔梗才三郎等に、因果塚の崩れたる事の一條を說きしらせ、ゆくりなくも世に罕なる、硯さへ獲たりとて、袱包をとき被き、やがてとう出て見せしかば、

妻もその子もいと怪しき、物語に耳を側て、聞くこと毎に驚嘆して、恙なきを歡びつゝ、小桔梗はつくづくと、硯を見て良人に對ひ、風流の心をはしませば、かゝる古物に愛で給ふを、わろしとて申すにあらねど、むかし執念き惡僧が、今般の時までいと惜みし、錢を獲て人にとらせ、又その硯をみづから取りて、家の寶とし給はゞ、いかでか祟なきこと侍らん、墳の壞をとるだにも、わらはは心にかゝり侍りき。硯は藥劑になるものならねば、なくとも事は缺ぬかし、只舊の如く窆へ投入れ給ふにますことなからん、見るも忌ふしく覺さずや。と正首に禁むれば、才作聞きて冷笑ひ、脆き婦人のこゝろには、しか思ふも理りなれど、既に數百の年を歷て、自然と崩れし窆より、出し硯は天の賜、さらずば夢にも見がたきものなり。陰鬼攸を失ひて、惡靈消散

したらんには、今更何の祟あるべき、これは御身がしることならず。と拒む辭もあらやかに、日來に似げなく只一つの、硯を惜む良人のこころを汲みかねて、小膝をすゝめ、かくまでに愛で給ふを、又まをさんは恐けれども、むかし守にもこの沙汰あり、墳を發きてその硯を、とらばやと仰せしを、わが父諫めたてまつりて、その沙汰止みぬと稱きとき、聞きつることの侍るかし。せめて硯をそが儘に、守へ進らせ給ひなば、才三郎が後ゝまで、家の榮をますよしあらんに、守へも報知さず秘給はば、塚の鬼の祟なくとも、影護ことならずや。と云はせも果てず頭をうち掉り、おん身が異見は常言にいふ、女人さかしくてともすれば、牛售り損ふ類なり。縱この硯の事、むかしその沙汰あればとて、そはおん身が稱き時、只うち聞きたるのみならば、いと覺束

なき事にこそ。しかるに今故もなく、これを守へ進らせなば、孰か詔ふと云はざるべき。人の妬忌の懷さに、俸祿を辭し、仕を致し、弓箭を捨て十餘年、かばかり安く世をわたるに、又改めて榮利を謀り、わが子の爲に何を求めん。足ることをしるときは、富まずといふとも心は富む、官途は事毎に、心苦しきものなれど、仕へんとも又つかへじとも、そは子どもらが人となる後、おのがまに〳〵すべきなり、才三郎も爾こゝろ得よ。と敦圉あらく說き諭すも、物が云はする自誇驕慢、この硯より後終に、筆に命毛危くも、すみ果てがたき枉屈の、かゝる物からかみならぬ、妻はとにかくいふがひなくて、强ては諫め得ざりけり。かくてその夜は深けたれば、そが儘親子臥房に入りつ、詰旦才作は、因果塚の壞をもて、お駒が右の拳を洗ふに、奇なるかな褻褌の

中より、握りつめたる掌なれども、一夜の東風南枝に渉りて、梅まづ一花咲けるが如く忽然と手を披けば、裏より兩の蟲出でたり。其形大きなるは、蟬に似て色青く、小きは蒲の色して、形蝦子に似たり。小桔梗等はこれを見て、且つ歡び且つ怪しみ、彼よ〳〵といふ程に、才三郎はその蟲を、捕へんとすれば衝と飛んで、大きなるはお駒が方へ、小さきは才三郎が肩を飛越えて遂に見えず、往行もしらずなりぬるを、驅索めんとて立騒げば、才作急に押禁め、子どもよ益なきことなせそ、お駒が指の節伸びて、人なみになりたるに、その掌より出でたる蟲を、あさり求めて何にかはせん。大約人の病によりて、奇蟲を生ずることあり、癖石、白蟲、勞蟲なんど、皆是人の病ひなり。さればお駒が掌より、出でたる蟲も指の節を、伸べ披かせぬ病なりけん、絶えてあやしむことにはあらず、只打捨ておきねといふ。もの識る德は怪しきを、怪しと思ふ氣色なければ、妻もその子も感服して、疑は解くるものから、後に思ひあはすれば、彼蟲はさる類にあらず、錢を還すと世にいふなる、實は蜻蛉にして、牛句坊等が生を攀く、これも又その一つなりしを、才作だにも知らざりけり。さる程に尾花夫婦は、お駒が右手の開きしより、その歡びに得も堪へず、彼が二八にならん頃、才三郎に妻せんとて、はやその事を明〻地に、子供等にいひしらせ、是よりして小桔梗は、日毎にお駒に手習させ、又縫刺の事を教え、糸竹の技までも、誨けずといふことなく、去歳と暮し、今年とあかせば、お駒が容止八しほにまして、沈魚落鴈、羞月閉花と、唐人の云ひけんも、これかと思ふ少女になりぬ。さは十あまり三四よ

り、生ごころつくまゝに、迭に慚ぢて才三郎と、ひとつ處に遊ばねども、こゝろの中には娛しくも、結びしと思ふいもとせの、山も峽ある糸櫻、又來る春を待ちつゝも、親染ます〳〵深かりけり。案下某生再說白木の諸平は、はからずも尾山にて、才作を救ひしとき、八貫あまりの古錢を獲てより、これを本錢として薪を賣るに、日毎に五倍十倍の、利を得ること大かたならず、かくは薪は鈍はしとて、山の立木を買取りて、これを賣るにいよ〳〵利あり。すべてそのする所、あたらずといふことなく、僅に三年あまりが程に、數百金の得つきて、ゆたけき人になりしかば、漸く田舍をいぶせく思ひて、活業の爲よろしき地方を、彼此とえらむにぞ、關の小川の堺橋は、東山道の咽喉にて、稲葉山へ遠からず、京鎌倉の便路なるに、しかも彼處は水邊にて、木

青蚨圖說
青蚨形如蟬而長其子如蝦子著葉上一說形如氣青色有光生於池澤多集蒲葉上故名蒲氣以母血塗八十一錢以子血塗八十一錢留子用母留母用子皆自還誠仙術也說見淮南子萬畢術于宝搜神記李珣異物志今按本草圖經以測色之
蚨母
蚨子
乾元永寶
天聖元寶
天通元寶
天禧通寶
天祐元寶
至道元寶
咸平元寶
景德元寶
大中祥符元寶
天聖元寶
皇祐元寶
至和元寶
嘉祐通寶
治平元寶
熙寧元寶
元豐通寶
元祐通寶
紹聖元寶
元符通寶
崇寧通寶
大觀通寶
政和通寶
重和元寶
宣和通寶
建炎通寶
紹興元寶
正隆元寶
大定通寶
泰和通寶
大安寶
崇慶元寶
至寶
貞祐寶
興定寶
元光寶
正大寶
天興寶
天興元寶
天興通寶
天興重寶
天興元寶
天興通寶
天興重寶
天興元寶
天興通寶
天興重

を挽入るゝに便りありとて、西の橋詰へ移徙して、花瓦嚴めしく葺き
かけたる、五間四面の材木店を開き、わが生れたる里なればとて、白
木の朮の字の點を省きて、家名を白木屋と唱へつゝ、兩三人の小厮を
使ひて、國守の所要をうけ給はり、京鎌倉いへば更なり、浪華左海の
浦までも、買賣せずといふことなければ、人みな諸平が富むことの、
速なるに驚嘆し、その高運を羨みけり。さはれ諸平は心ざま、吝嗇
なるものなれば、貪るのみにて散すことなく、朝夕の飯だにも、小厮
等が腹には滿せず、只責使へども使ひ足らねば、みづから木をひき車
を推し、玄冬の寒き朝も、汗を流して日を暮すを、いと嗚呼なりとて
笑ふも多かり。この時までも女房囲は、半身竟に利かずして、凡そ三百
六十日、うち臥してのみありと雖も、諸太郎ははや九歳になるものか

ら、その性殊に鈍くして、果敢〻しくはものもえ云はず、諸平は只
管利の爲に、小厮等を責使へど、子を愛するのみ人にまして、敎ゆる
といふことをは得しらず、渠が隨意養ふに、多病なるひとり子の、徒
然を慰めかねて、閒人もがなと思へども、その人を求むれば、又一人
の費えありとて、そがまゝに默止つゝ、有一日諸平は黃金澤へいゆき
しかへるさに、靑墓の里離處、圓願寺の林原を過る程に、と見れば年
十六七なる田舍兒の、長旅に窶れたるにや、衣なども破れ垢づき、日
ぐろみたる菅笠に、同行二人と寫したれども、伴侶かと思ふ人もなく、
只ひとり街道なる、松の株に尻をかけて、泣然と泣きてをり。諸平は
その性慳貪にて、人を憐むものならねども、因緣遁れずやありけん、
思はずもそのほとりへ立寄りて、小丈よ爾は何處のものぞ、何とてひ

とり泣きてやをる。伴侶に後れ、途に迷ひて、心ぼそさに泣くにやあらん、縁故をしらせよと、しば〳〵問はれて目を拭ひ、われは元來伴侶もなく、ひとり旅するものなりかし。年四五歳の春の頃、別れし父は當國なる、稲葉山にあるよしを、豫て聞くのみ信なければ、見まくほしさに遥〻と、しもつ總なる手口より、いな葉の山へ來て訪へば、父は黄泉の客となりて、はや十四年を經たりとなん。こゝに恃を失ひて、舊里へもかへられず、形なき身のをはりにも、近江にもしる人はなし、進退既に究りて、泣くより外に術もなき、心ぼそさを猜し給へ。といひかけて又泣きにけり。諸平はこれをつく〴〵と、聞きつゝも思ふやう、この小竪子が面魂、騙などするものにはあらず、遠く來て今更に、身をおく處なしと云へば、わが宿所へ伴ひて、小厠にして使ふとも、人なみなる給銀を、とらするに及ばねば、後〻までもわれに益あり。こはゆくりなくよき物を、拾ひにけりと、胸にまづ、おく算盤の玉ならで、彈くがごとく目をしばたゝき、年少くしてかくまでに、孝心ふかき人の凋落を、誰かあはれと思はざらん。われは關の小川にて、白木屋諸平と呼ばれつゝ、樸素木を買賣して、人なみに世を渡るものなり、汝が薄命を憐むあまり、救ひ取て得させんず。こは莫大の恩なれば、いふにしも及ばねど、主の爲には骨を惜まで、生涯われに仕へんや、倆が父はいかなるものぞ、汝が名は何と呼ばれたる。と問へばやうやく涙をとゞめ、かくまでに憑しき、人ともしらず値偶せしは、不幸の中の幸なり。物數には足らずとも、小厠となして給はらば、身を牛馬になすまでも、力を竭して仕へざらんや。抑僕は、鰈介が一

子に、名を鍔松と呼るゝものなり。父鍔介は手口村に、處ひさしき莊客なれども、卑損水損に家衰へ、果はすべなき里の債を、償ふ爲に只ひとり、些の由緣を心あてに、遠く美濃路へ赴きて、今の國主の御内なる、蘆月どのゝ奴隷になりぬ。と風の便りに只一度、聞えし後は音耗なし、と親しき人に聞たるのみ。母をもしらず、父をも認らず、年十一二の比よりして、父御の安否を問はばやと、思はざる日はなけれども、戰世は彼此に、關の鎖の開かねば、旅することも心に任せず、母には三ッの年に後れて、今の母は母の妹、わが爲には叔母なれども、心苦しきことのみなれば、只一すぢに父にあはんと、思ひ決めて舊里なる、手口村を逐電し、百里にあまる道すがら、戰場を過る日は、流矢に膽を冷し、山林を踰ゆる日は、山豪に刼かされ、百折千磨の艱苦を凌ぎて、稻葉山へ來てとへば、父は天文はじめの年、蘆月の家斷絶せし比、守より金を給はりつゝ、舊里手口へ歸るとて、合渡林のほとりにて、鳥銃に擊れたり。仇人は定かならねども、獵夫某甲が所爲なるべしとて、そのもの忽ち捕へられ、いまだ分明ならずして、獵夫は獄舍に身まかり、その事休みぬ。といな葉なる、彼此人の物語に、夢かとばかり驚かれ、天に叫び地に叫べど、外によるべはなき父の、墓所をたづねて合渡に赴き、其處にその夜をあかしつゝ、軈て頭髻を剃りこぼち、親の菩提を弔はんと思ひて、合渡より此處まで、いくその寺へ身を投て、薄命を告げ出家の事を、只管憑み聞ゆれど、保人なければ許されず、せん術竭きて身の往方を、定めかねたる折にかう、救はせ給ふはわが爲に、產砂にます利益なれ、いと尊しと手をあはし、

讐としらねば伏拜む、誠見えても腹黑き、諸平は聞くと聞く毎に、針もて胸を刺さるゝごとく、わろき奴に撞見て、ようなきことを云ひつるかな。と悔しく思へば點頭くのみ、且くは應へも得せず、又つく〴〵と思ふやう、むかしわれ、一旦の慾に惑ひて、鍬介をうち殺し、その金を取りたれども、山洪波に推流されて、一枚も身には著かず、今ゆくりなく渠が子と、この處に撞見て、その困窮を救はんと、いひしも追れぬ因緣なるべし。金を失ひ、妻を喪ひ、女兒を捐て又今の、女房囮が難病も、故ありぬべく思ひしより、朝な夕なの念佛も、彼鍬介が爲にすなるに、今又その子を救ひなば、わが罪障も消滅せん、これにます功德はあらじ。と思ひ返して嘆息し、いと哀れなる物語り、審に聞けば痛ましさも、はじめにましてなほ痛し、こなたへ來よ。と先立ちて、關の小川へ將てかへる、恩とうらみの堺橋、下ゆく水に譬へたる、人の往方は定めなき、鍬松が亡母は、時賴藝の妾なりき。しかるに賴藝武威衰へ、美濃の守護職を齋藤道三に奪はれて、富田に閑居し給ふころ、鍬松が母は身の暇を給はりて、その妹斧もろとも、緣所につきて下總なる、手口村へ赴きつ。鍬介が妻になりて、僅に二百餘日にして、鍬松を產みしかば、鍬介はやゝ曉りて、原來この子は時殿の落胤なるべしと、思ふのみにて妻にも得云はず、忌隔てたる心はなくて、塵さへすえず孚む程に、三年といふ夏のはじめに、鍬松が母身まかりければ、鍬介愛慕の哀みに得たえず、をさなきものゝ姨なれば、よろづにつきて後〳〵までも、迭に憑しかるべしとて、廼ち妻の妹なる、斧を後妻にせし其秋より、田園に損おほくて、身上立つべうもあらざ

れば、鰈介は妻子を留めて、女房が故郷なる、美濃國へ赴く程に、世ははや道三に立代りて、心あてにしたりける、由縁の人も憑しからず、已むことを得ずして、蘆月一角が奴隷になりたれども、次の年主の一角は、尾花才作に擊れて、その家斷絶し、鰈介は合渡にて諸平が爲に命を隕して、十餘年を經るまでも、合戰諸國に止むときなければ、舊里にてはしるよしなかりき。されば鰈松は、幼稚よりその心ざま卑しからず、孝心も又人にまして、やゝ東西を知るころより、亡母の爲に香花を絶さず、美濃なる父を慕へども、繼母斧は姉に似ず、極めたる淫婦なれば、歸らぬ良人を戀しとも思はで、近郷の破落戸なる、丈八といふ壯佼と密通し、年なほ幼弱き鰈松を情なく罵使ひて、絶えて骨肉の姨がひはなけれど、鰈松はこれを恨まず、只その行狀の人なら

ぬを、うち歎くのみ色にも出さず、患苦の中に生育て、年はや三五の上に出づれば、斧はいよ〳〵忌嫌ひて、咎なきものに科を課せ、打擲することと大かたならねば、鍔松はその呵責に得堪へず、身の薄命を歎きつゝ、つく〴〵と思ふやう、母のわれを憎み給ふは、丈八と情由あることを、われよく知りて人にや告ぐると、思ひ給ふ故なるべし。われ知らざるにあらねども、三ッの年より養育せられし、姨の浮名をいかでか立つべき。さればとて明〻地に、諫むることもかなはねば、こゝに居るともその甲斐なし、今ははや人となりぬ、一たび美濃へ赴きて、父の安否を問はざらんは、大きなる不孝なり。と只願におもひ決めて、一封の遺書に思ふよしを書とどめ、手口を逐電したるなり。さればそのする所、誠ならずといふことなく、縡みな親の爲なれば、皇天その孝を監み、神明これを儐きてや、しらずして仇人の家に、身を投せしこそ不思議なれ。

卷之三

落黄葉

白木屋諸平は、極めたる殘忍の癖者なれば、鍔松が薄命を深く憐むにあらねども、妻のうへ子のうへには、心にかゝることのみなるも、鍔介が祟にやと年來悔しく思ふ折なり、その子の危窮を救ひなば、わが罪障を贖ふべし。と是にすら利を計りて、軈て宿所に將てかへり、陽には恩を施せども陰にはいたく忌みて、露ばかりも心を放さず、又使るゝ小厮の中に、その名を岐藏と呼ばるゝは、當國羽栗郡なる、復塚の婦婦が子なり。これは諸平が、堺橋へ材木店を開きしころより、はや二三年使はれて、年十八になるものから、鍔松と立並びては、心操

いたく劣りて、主の爲になるものならねば、諸平はこゝろに鍔松を、忌むよしあればこれにすら、及ばずとして絶えて用ひず。算筆なんども年にまして、心眞實なる鍔松には、火を焚かせ水を汲ませ、その暇あるときは、諸太郎が間人にして、店の事に與らせねば、却つて雲時の休暇もなく、奔走してぞ日を送りぬ。實に湯にも入り、水にも浸さる。つかはれて只苦しきものは、子衞と茶扨なりといふ、世の常言も故あるかな。諸太郎は年もはや、九ツになりぬれば、癇疾に閉ぢられて、途三町とは走ることかなはず、物いふことさへ譫誕らで、六七歳なる童にも及ばざることのみなれば、動すれば鍔松が背に被りて河原に出で、彼をこせ此をとれ。と起居隙なく使へども、鍔松は隨分と、その心に悖ふことなく、それがまに〳〵冊けども、諸太郎は癇癪と我

隨に短氣つよくて、常に鍔松を鞭罵り、なほ打飽かで蹉跎し、聲ふり絞りて泣く毎に、諸平はその理非を問はず、走り來て鍔松が小鬢を、三ッ四ッ左右へ打髻めて蹂躙り、この白癡こりずまに、童と思ふて主をや侮る、渠は多病のものなれば、何にまれその意に任して、よく衞すべきことなるに、とにかくに悖ふて、泣かして蚘を惹出せとて、可惜穀を費して、われ徒汝を養はんや。今の疼さを忘るなと、敦圉哮りて又蹴倒し、諸太郎を賺しこしらへ、わが子の笑貌見るまでは、なほ囂〻と罵り止まず、傍痛きことのみなれば、女房囮は臥房隔て、正なきことを聞く毎に、わが子を召びて教訓し、折〻良人を諫むれば、諸平はます〳〵打腹立ちて、いよゝ鍔松を罵るにぞ、諸太郎は頭に乘りて、綷みなおのが隨にせり。この故にこそ鍔松は、手とも云はず、足とも云はず、支體に痍は絶えねども、こゝを出ては又さらに、投してゆく處もなし。さらずとも艱難を、救はれたる恩を酬はで、脫れ去らんは人にあらず、舊里にありし日は、姨御にいたく打擲かれ、今又こゝにこの呵責を、受くるも過世の惡業ならん。と只身を責めて主を恨まず、なほ正首に仕へけり。かくて今玆は果敢なく暮れて、明れば天文十五年、春は過ぎ夏長けて、迎梅雨晴るゝ比諸太郎が鍾愛せし、金魚を鯆に捉られけり。金魚は昔わが邦になし、先朝後柏原の御時に、文龜二年壬戌の春正月、異國よりこれを渡して、左海の津に來舶せり。この時は魚の色も、赤白黑の三種にて、更紗などいふものはなし。その後これを畜ふものあり、その種類も夥出來て、銀魚あり、玳瑁魚あり、これは今いふ更紗魚なり。又金魚にして尾の形、鯽魚に

似たるを金鯽魚といふ、所謂今の和金魚なり。又金鯉魚あり。矮魚あり、金鯉は卽ちひごひなり。矮魚は卽ちらんちゆうにて、らんちゆうは蠻名ならん、その色黄なるを丹魚といふ、これらの稱呼は漢名なり又簾尾あり凹尾あり。兩端、葡萄、一文字、八文字又十文字、鶴鴿、筒尾の種〻は、尾の形をもて名を得たる、三岐、四岐、箭尾房尾、桃尾尉斗尾と名もいろ〳〵に、聞えしはいと後の事にて、はじめて金魚の渡りしより、僅に四十餘年を歷たれば、價も殊に貴けれども、諸太郎一度これを見てより、獲まく欲しとて呱きにければ、愛に溺るゝ心より、諸平は日來の客に似げなく、廼ち金魚二尾を購めて、背門なる庭へ鍱松して、俄頃にさゝやかなる生洲を造らし、餌畜、水曝、旦夕に生洲の蓋の開闔まで、みな鍱松に任したるに、件の金魚失せたれば

諸太郎は只眉に火のつくごとく泣狂ひて、賺せども叫び止まず、その聲常にましたれば、諸平は店より走り來て、綷の趣を聞きもあへず、鍱松が項上颺みて、膝のほとりへ引寄せつゝ、握れる拳の麻るゝばかりに、數回打懲して、眼を睜り、聲を振立て、やをれ白徒、生洲の蓋をよくせよ。と豫てより云ひつるに、主命を物ともせず、足らぬ心のしぶとさに、等閑にしたればこそ、夥の錢を捨てさせたれ。おもふに金魚を盜める奴は、またく鼬の所爲ならず、汝竊に人に賣りて、罪を鼬に負はするならん、明白にこれを云へ。首伏せよと敦圉て、又數回打懲し、なほその怒に堪へずして、鍱松をいたく縛め、背門の鴨柄に釣揚げて、刀子鍼といふものを臀へ突立て、いと苛くも責めしかば、鍱松ます〳〵苦痛に得堪へず、ゆるし給へ〳〵。と叫ぶ聲、物悲

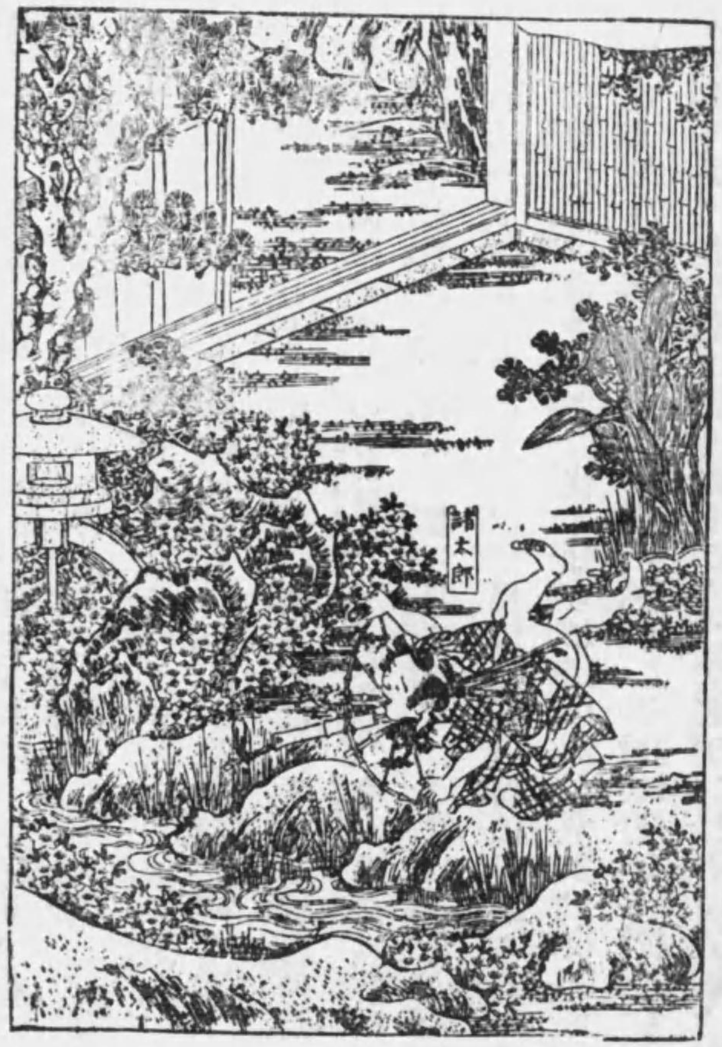
しく聞えしかば、囮は忙慌きて、病の床を膝行出で、言葉を竭して良人を寛め、小厮等も諸共に、鍱松が爲に勸解しかば、諸平は僅に手をとゞめて、鍱松を佶と疾視へ、この偸兒、けふよりして三日のうちに、彼金魚を出さずば、その度は釋迦にあれ、孔子まれ勸解るとも、われ決してゆるすことなし、覺期せよ。と罵り捨て、衝と外面へ出しかば、囮は軈て小厮等して、鍱松が索を釋おろさせ、竊に勦り慰めけり。さる程に鍱松は、全身既に腫痛みて、その日は物の用に得たゝず次の日もなほ骨節は疼めども、苦痛を忍びて薪水の事を勤め、ひとりつくゞ〳〵思ふやう、けふ翌の内、彼金魚を數の如く贖はずば、われは必ず打殺されなん。さればとて去年の某月、われこゝへ來つるより、三度の飯は給はれども、衣などはなほその時の儘にして、綿入たるを

夾衣とし、夾衣を又單にして、かう破れ果つれども、古衣一つも給はらず、況いて一緡半錢も、手に長物とてはなきものを、何をもて價貴き、金魚二尾を貲ふべき、只獺にあれ、鼬にあれ、金魚を捉りたる癖者を、罠にかけて眼前、わが盜せぬよしを知らしまゐらする外術もなし。計るになほ生洲の中には、小鯽魚三つ四つあるなれば、彼味を忘れ得ず、晝來ずば夜は來べし、さは疾くひとり尋思しつ、舊里にありしとき、獵夫が狐を捕る、弶とかいふ物を、折〻見たることあれば、それに倣ふてしのび〳〵に、一張の彈き罠を造りつゝ、これを生洲のほとりにかけて、一尾の鯽魚を置餌としつ、物ありて中るときは、弦外れ弓延びて、箭に彈かるべく機關たれども、日中は事おほくて、獲を俟つに暇なければ、かけたる儘にうちも守らず、ゆきめぐり立繞り

庭の方に心をつくるに、背門の槐に日影傾き、雀も塒餌求食る頃、生洲のかたに物ありて、忽地苦と叫びしかば、鍔松驚きあやしみて、走り出でつゝこれを見るに、無慙やな諸太郎は、置餌の鯽魚をかい掴み彈罠に彈かれて、喉より項まで、箭につらぬかれ血に塗れ、足をそらさまにして仆れたり。鍔松はこの形勢に、胸躍り、足攤て、魂も身に添はず、輾ぶがごとく走寄りて、箭を拔き、抱き起しつゝ、さま〳〵に勦はれども、絳絶れたれば詮術なし。淺ましや愍いに、金魚の仇を復しなば、呵責を脱るゝこともやと、おもふばかりにわが性の、好まねば生れてより、一度もせざりし殺生を、よしなや人にも告げずして、竊に罠をかけしかば、物は獲もせで罪重き、この妖孽を釀したり。和子ははや年の數も、左右の指に滿ち給へど、その性鈍くをはすれば、

弶も罠もしり給はず、置餌の鯽魚をとらんとて、彈きの弦に頭をさし入れ、果敢なく命を隕し給へり。手づからこれを殺すにあらねど、わが掛けたりし弶をもて、主の一子を喪ひては、絶えていひ釋く言葉はなし。命運の竭る所か、なすこと毎に齟齬へば、後悔こゝに立つよしなし。只速に死なんには。と思ひ決めて遽しく、庭の松に索を投げかけ、縊れんとすれば生憎に、太やかなる索ながら、如何にしてかいと脆く、三たびかゝるに三度斷離れて、とかくすれども竟に得死なず只吭をかき切らん。と思ふ物から是も又、手に寸鐵をもたねば、思ふのみにて術もなし、いでや小川へ投まんとて、庭門より出でんとして、又忽地に思ふやう、よしや百歩の内なりとも、こゝを去つては逃ぐるに似たり。この儘にしてわれ歿なば、誰かは緣由をしるべき、せめ

鎌松


諸太郎

て一筆遺さん。と思ひ返して竹椽の、ほとりへ軈て立歸り、右の小指を嚙斷りつゝ、血をもて障子へさや〳〵と、綽の趣を書遺し、又諸太郎が死骸に對ひて、沃ぐ涙の覆水も、悔ひてかへらぬ身の科を、勸解る唱名一筋に、冥土の俱を契りつゝ、折戸の閾踏越えて、關の小川へ死にゆく、歎きはいとゞ深くとも、清き心は神ぞしる、因果覿面鍔松が、父鍔介は諸平が非義の、鳥銃にうち殺され、今又諸平は鍔松が、かけたる罠に子を殺さる、彼は一隻の兎に起り、これは二尾の金魚に終る、輪廻はめぐれる車のごとく、應報は只響の物に、應ふるに異ならず。天網疎にして漏さねど、仇と知らねばはからずも、復す怨を身の仇にして、底の水屑と只管に、死を決めしぞ哀れなる。折しも黄昏の事なりければ、諸平等は事に紛れて、この條のことをしらず、背門の折戸を鎖すときに、はじめてこゝに諸太郎が、死したるを見てしかばいかで驚き騒がざらん。囲も人に扶けられ、竹椽のほとりに出て、よゝと泣きつゝ伏沈めば、諸平はわが子の亡骸を、抱き起して且くは、涙に物を得も云はず、とかくして鍔松が血をもて障子に書遺せし、幾行の文字を見るに、罠にかゝりて命を隕せし、諸太郎が異なる光景、やゝ疑ひは解けながち、うちも置くべきことならねば、まづ小厮等を部して、鍔松を逐はするに、彼ははや身をや投めけん、堺橋の欄干に、脱掛けたる草履ありとて、繩にこれをもて歸りて、綽の趣を告げしかば、諸平は遂に術なくて、囲もろともわが子の骸を、打守りつゝ泣明し、次の日尾山の茶毘所へ送りて、遺骨は菩提所なる白木の報輪寺へ葬りけり。かゝりし程に女房囲は、只諸太郎がことをのみ、いひ出

ては泣き、口説きては涙の乾く隙もなし。さらぬだに九年が間、うち伏してのみありつるに、かゝる憂患に病朽折れて、白粥だにも咽喉に下らず、日に添ひて玉の緒の、絶えも果つべう見えしかば、諸平はまゝ〳〵智苦しさに、今昔をおもひやれば、心弱くも鍬松を引入れずば一子を、いかでかは喪ふべき、よしやわれ、這奴が親なる鍬介を、鳥銃にかけたりとも、先非を悔ひてその子を救へば、善報こそあるべきに、家狗に手を啖はれ、この殃危にあふを思へば、涙脆くて人の爲、慈悲善根は無益の所行なり、悔しきことをしてけり。とおのが勝手に神を恨み、佛を怨みて焦燥のみ、人に告ぐべきことならねども、女房囮が斯く有とは、知らで歎くを慰めかね、昨日にはます顔の憔悴を、さし覗きつゝ歎息し、大約人の親愛は、夫婦にますものなけれども、

いと慙はしきことなれば、おん身にも告げざりし。われに一個の女兒あり、渠生れて纔に百日前妻喚聲身まかりしかば、いよゝ養育の便着を失ひ、しかも端午の誕生なれば、相譚ふとも養ふ人なし。已むことを得ず夜に紛れて、嬰兒をかき抱き、彼此と徘徊せしに、宿緣ありてや思はずも、小川の橋をうちわたり、尾花氏の門に棄てしを、彼人軈て養ひ取り、お駒と名づけて寵愛す。よりてわれ、曩に薪を賣る序に、知らず顔して彼處に赴き、女兒を見れば容止も、儔稀れなる少女になりつ。かくて又この處へ、移徙せしより彼人の、宿所に對ふわが背門は、川一條を隔つるのみ。彼處よりも、是處よりも、居ながらにして見ゆれども、吾儕斯う發跡ては、彼處へゆくべき所要はなし、我子にして子にあらぬ、お駒を見んとて半晌も、活業に懈らんは、無益の所

爲。と思ひ絶えて、外ながら見にも得ゆかず、兩三年を過ぐしつゝ、僂ふるに女兒も今は、その年二七になりぬれば、見し比よりも又さらに、艶麗にぞならんずらん。これを思ひ彼を思ふに、諸太郎は生れし日の、令月吉日なりしかど、纔に十年を一期にして、親には長き歎きを遺し、又お駒が誕生は、諱む日なれども恙なく、棄てたる親に惜まるゝ、吉凶は事に泥みて、一概には決めがたし。吾儕不思議に發跡んと、豫ておもはゞ金成し、玉なす女兒をやは棄つべき。彼もし家に在んには、腹は貸さねどかゝる時、御身が憂苦を慰むる、よすがともならましものを。と喞がましき物語に、囮はしば〳〵嗟嘆して、やうやくおもきまくらを擡げ、前妻に女兒ありしが、孕む便りなき隨に、親知らずといふものに遺はせし。と告げられしより忘れもせず、往方いかにと折節は、思ひやる日の侍りしが、實は棄て川一條、隔つる里にあらんとは、神ならぬ身のしらざりき。正しく腹に宿さずとて、女兒は母の爲に賴母しきものなるに、いと借しき所行し給ひぬ。そは今更に百遍悔ひ、千遍悔ふともかへらねど、棄つる門こそあるべきに、御身が古主の仇人なる、才作ぬしに拾はせしは、知らぬこととは云ひながら、後のうらみに侍るかし。といふに諸平は氣色かはりて、組みたる膝を立直し、われだに知らぬ一角どの、仇人をおん身は誰に聞きてか、尾花氏とは云ふやらん。と訝れば嘆息し、人傳ならでその事をはじめよりよくしりて侍れど、わらはが嫁りて來つる比、秋の夜ながき寢物語りに、おん身が古主は蘆月ぬし、母刀自は又彼人の、乳母なりしと告げ給ふを、聞くに奇しき夫婦の情緣、わらはも又二八の比ま

で、稲葉山に生育て、才作ぬしの阿翁なる、牧村氏の奥さまの、炊妾に參りしかば、一角ぬしの擊たれしころ、主の夫婦がその事を、密やかに相譚ひ給ふを、ゆくりなく竊聞侍りき。緣故は箇樣〳〵と、一角が才作に擊たれたる絆の趣、いとも苦しき息の下に、首尾を說知らし、且らくして又息を吻き、それより三年の春の比、わが身の暇給はりて、舊里白木へ立歸り、媒妁あり、緣ありて、嫁ぎて後にはじめて知る、良人の故主は蘆月ぬし、某の年月某の夜に、敵手はしれず擊たれ給へば、竟にその家斷絕せり。といと本意なげに告げ給へば、愁い主の仇人をしらして、良人の怒を惹起さば、これより如何なる歎きをせん、それも又量りがたし、誠に口は禍の門とか云へば何事も云はぬにまさるものあるべからず。と思ひにければ今日までも、さてありける

に棄てられし、女兒が往方いと惜さに、われにもあらで口づから、益なきことを告げ侍り。といひあへず咳入りて、そがまゝに臥しければ諸平は呆れて醉へるが如く、醒むるが如く手を抗げて、百會のあたりを直と拍ち、原來古主の讐敵は、尾花才作なりける歟。かゝりせば初めより、などてや我に告げざりし、もちろ一角ぬしは、わが母の乳をもて孚みまゐらせたれども、われには異なる惠みもなく、奴隸にして使はれたるに、一ッなき命を的に、主の仇人を擊たんは嗚呼なり。しかはあれど、怨ある人とも知らで、女兒お駒を其が門へ、棄てたるを如何にせん、這奴は守の老臣たる、牧村ぬしの婿なりとも、今見る所は浮浪人、何程の貯祿あるべき、無慙やお駒は殊に富む、實の親は川一條を、隔てこゝに居るとも得しらず、月にも比へ花にも喩へん。可

惜少女は浪人の、女兒と云はれて一生涯、足る由もなく過すらめ、こは皆な父が悞なり。こばかりにして今更に、取り復すべき方便はなし、かゝりせば尾山にて、才作が妥へ、墮ちたる時そがまゝに、見殺しにすべかりしを、口惜き事してけり。と勢猛く聲立て、罵らんとして後方を見かへり、もし小厮等に聞かれやする。と思へば口を鉗みつゝ、あけて得いはぬ胸の戸に、これより下和と下破の關、ながく恨を含みけり。

落黄葉の下

さる程に、囮が病苦身に逼りて、鍼灸藥餌の效もなく、諸太郎が初七日に遂に空しくなりにけり。寔に死喪愛惜の悼みのみ、賢きも不肖なるも、哀慕の塵に目もあはず、憂を掃ふ箒なければ、只一身を利と慾に、造りなしたる諸平なれども、こゝに再て妻と子を、一旬がうちに喪ひて、殊更によわり果て、活業だにも手につかで、佛事追善の營み過七の墓參に日を送るに、霎時こそかくてもあれ、實に去るものは日に疎くて、やうやくに思ひかへせば、これも又無益の所行なり。よしや財の限りもて、僧に施し、俗に施し、只念佛三昧に、千萬年を送るとも、これが爲に費す錢は、死したるものと諸共に、かへる日は絶えてなし。土の下なる妻と子に、かへらぬ錢を費んより、方便をめぐらし便宜を得ば面りに處る女兒こそ、返すとならば還りもせん、渠が十二分の縹緻もてよろしき女婿を選みなば齎らしなども多く獲易し、すべよくお駒を取復す計策もがな。と心を苦しめ、智囊を撈れども、いひ寄るよしはなかりけり。不題、下總なる手口村には、鍔松が一通の

遺書をのこしつゝ、美濃路を指して出でし比、養母斧は追ひも止めず、密夫丈八を招きよして、彼遺書を見せしかば、丈八は初め尾りをうちかへし見て冷笑ひ、十三四年信なき、親の安否を問はん爲、這奴はるばると稲葉山へ赴かんとて思ひたつとも今の世は地方として、戰場ならぬ里もなく、關の鎖の固ければ、忽地途に抑留せられて、餓死せんは必定なり。只うち捨て置き給へ

といふに斧は心かちゐて、いよゝ憚る氣色なく、是より丈八を宿所に留めて、淫樂をのみ事とせり。抑斧が此年來、貯祿薄き家を守りて、安らけに日を送るは、何を生活にするやらんと、はじめは訝る人も多かりさればこの斧は、そのはじめ姉諸共に、美濃國に人となりて、時賴藝のおくざまに、給事せしものなれば、（其事つばらに二の卷に述べたり）今村落に漂泊し、農夫の妻になりて、身は編蓬にありと雖

も、物のいひざまいとみやこびて、結髪化粧も鄙ならず、その容止は姉に劣りて、十分の美人ならねど、笑をもて人を迎へ、狎るゝに易き淫婦なれば、夫一人をいかでか守らん。況いて鰈介が居らずなりては、媚を衒りて里の壯佼を魅かし、その人の錢をとり竭せば、又いくばくも夫をかえて、一鄉の譏を屑とせず、斯う汚穢たる所行をして、年來を經る程に、かへらぬ良人を戀しとも思はず、坐して食ひ、暖に衣て、世はなか〳〵にやすしと思へり。かゝればそのする所、年の老いたる若きをえらまず、又男の美き醜きに管はず、只錢あるを得意とすなれば、馴るゝと雖も飽くこと速く、會ふと雖も離れ易し。そが中に、彼丈八は美濃の加〳〵島のものなりき。年十四五の比京へ上りて、商家の小厮になりつ、其處に五六年を過せしかば、算筆なんど拙からず。すべて商賈の經營には、才闌けたるものなれど、奸智も又人に捷れ、その心ざましぶとくて、果は主の物を掠めて、墓なく京を逐電し、舊里なる兄に逐はれて、武藏下總の間に、夥の年月を過せども、定めたる宿所もなく、算筆をもて人に傭はれ、或時は今様の曲子を唄ひて、酒宴の席を興ずるを、生活とするものなり。かくて丈八は、手口の鄰村へながれ來て、彼此の壯佼をそゝのかし、只手づかみなる利を事とせしかば、里人等もやうやうに、惡きものなりとは知りつゝも、田舍には手蹟などを、よくするものゝ稀なれば、流石にその才を惜みて、心づよくは得も逐はず、とかくする程に丈八は、手口の斧にかたらひよりて、しのび〳〵あふ程に、錢あるものにあらねども、斧はおのが愛るまに〳〵、結句丈八には錢を貸し、衣を貸して事みな實情を竭

せしかば、淫婦が罠にかけられたる白物等も、大かた曉りて舌を卷き、誰中垣を据えねども、漸〻によりも來ず。斧は情郎なる、丈八にのみあふことを、いとも娯しく思ふものから、壯佼等がみな中絶えては錢を催す術竭きて、心苦しくおもふ折、鍬松は出てかへらず。こは繼母の所爲なりとて、村長いたく斧を憎めば、里人等も憐まず、猛に鍬介が借財を、債るものさへいで來にければ、斧はこれに辟易して、辛くその年を暮しつ。明れば天文十五年、干戈旦くおさまりて、東山北陸の道ひらけ、近江美濃より歸るもの多かり。斧はこの光景に、心いよ〳〵安からねば、有一日丈八に云ふやう、去年の某月鍬松が、稻葉山へとて出でにしより、今に音耗はなけれども、わが良人恙なくて、なほ彼處にあらんには、此度途の便宜を得て、鍬松と諸共に、かへり

來ることもあるべし。鍬松はわらはが爲に、實は姉の子なれども、繼子ごゝろの僻めるまゝ、わらはが上にあることも、なき事までも父に告げなん。然るときは云ひ釋くに、云ひ釋きがたき事多かり、こは如何にして脫るべき。と眉うち顰めて私語ば、丈八さわぐ氣色なく、この事極めて難儀に似たれど、先にするときは却つてやすし、さのみな思ひくし給ひそ。といふに斧は小膝をすゝめ、先にするとは如何なる事ぞ審にしらし給ひね。と問へば丈八頰髭かき撫で、おん身が良人鍬介は、債を贖ふ爲なりとも、十四五年女房を、置去りにして信せず、螢が鹽燒く辛き世に、家を守り子を孚み、やすく世わたる婦はなし。かゝれば早くこなたより、稻葉山へ赴きて、これらの恨を述べんには、鍬松が讒するとも、彼人おん身を咎むるによしなし、これ先にすれば

やすきにあらずや。又彼人に事ありて、今更かへり來ずといふとも、きのふけふの形勢では、物貸す人もなき故に、落城せんこと近きにあり。おん身が故郷は美濃とかいふに、わが舊里も又美濃なり。われはいと少かりし時、兄に債を負はせしかば、勘當せられて十六七年、生けりとも死せりとも、迭に音耗するよしなけれど、多くもあらぬ同胞なり、今われ故郷へ歸るとも、ゆるさるべき比なりかし。さりとて兄は富むものならねど、加ゝ崎山の麓にて、獨夫株藏といへば、知らざるものなし。よしや兄が怒り得解けず、なほその宿所へ容れられずとも、竹馬の友も彼所にあれば、とにもかくにもなるべき事なり。さらば吾儕もろ共に、まづ稲葉山へ赴きて、鍬介がありなしを問ひ定め、もし恙なく彼所にあらば、年來の艱苦を告げ思ふまゝに恨を述べて、

いたく良人を責め給へ、又鍬介は彼處に居らで、往方しれずと聞えなば、世に憚りの關もなし。直に加ゝ島へ伴ひて、夫婦になりて一期を過さん、寔に一事両全の、謀はこの上なし、とく〳〵思ひ立ち給へ。といふに斧は大きに勸び、おん身が才の高きを思へば、こゝの筑波を投してゆく、稲葉の山も數ならず。わらはが故郷も美濃なれば、二親は世をはやうしつ、主なりける賴數朝臣は、既に滅亡し給へば、彼地に憑む蔭はなけれど、その舊里もおなじ州なる、おん身と共にゆけば心づよし。さはとて眉に火のつくごとく、猛に行裝を整へ、斧はまづ村長の宿所へ赴きて、旅だちのよしを告げ、良人鍬介が稲葉山へいゆきしより、年夥經たれども、雁の翅に書もかよはず、心くるしく侍りしに、今茲は關の鎖ざしもひらけて、彼地より來る人もあれば、今

日までは俟ち侍れど、なほ歸らねば心もとなし。途の伴侶も侍るなればわらはは稲葉山へ赴きて、良人はさらなり鍬松が、往方を索ねんと思ひ侍り。就ては些の田園を、債の代に領り給ひて、後〻の事は兎も角も、計はせ給へかし、これらの由を申さん爲、參り侍り。といひも敢ず、そら涙を拭ひつゝ、別を告げ、里人等にも云〻と告げて、遠から ず歸り來る、面持をする物から、家具はさらなり家さへに、竊に售りて路費に充て、門田の早苗とる比に、丈八もろ共起行して、日に歩み、夜に宿り、日ごろへて美濃の稲葉山へ赴きつゝ、こゝに初めて鍬介が、横死のよしを傳聞き、剩へその子鍬松が、往方も定かならざれば、斧はさらなり丈八は、これを物怪の幸ひにして、軈て斧を誘引つゝ、加〻島なる兄を訪ふに、家は昔にかはらねど、主人はわが兄株藏ならず、こは如何にと訝りて、緣由を尋ぬれば、その人答へて、舊の主人株藏は、身まかりてよりはや十四五年になりぬべし。彼人の上につきては、くさ〴〵の物語あり、天文元年某の月、今の國主の御内なる、蘆月刀禰の奴隷、鍬介とか呼ばるゝもの、合渡林のほとりにて、横死せしことありけり。しかるに犯人定かならねば、株藏と復市といふもの連累せられて、矢庭に獄舍に繫れつゝ、復市はそがまゝ身まかり、株藏は辛うじて赦にあふて歸りにけれど、身さへ心を勞して、いたく弱り果たれば、一たび病みて臥したるより、漸〻に憔悴、その次の年春の比、黄泉の客になりぬとなん。年なほ三十あまりの人の、妻子だもなかりしかば、そがまゝ空房になりたる比、吾儕由緣はなけれども、媒妁あつて家を購取り、本莊村より移住せし、是もはや十年になりぬ。

原來和殿は株藏に、由緣ある人にこそ、斯とは知らでは〳〵と、詣來給はば本意なからめ。其も此もしばしが程、あがり框に尻をかけ、茶を喫て憩ひ給へ。といと正首にいはるゝ毎に、丈八斧は呆れ果て、面をあはし舌を吐き、いふよしもなく其處を去りて、此彼相識るものを訪ふに、孰か丈八を惡棍としらざるべき。渠が京にありしとき、主を倒し、兄を苦しめ、逐電して年夥、所在も定かならざりしに、今更猛に女人を將て、舊里へ歸る事、その故量り知りがたし、おそるべし〳〵。と爪彈きして再びはよせも著けず、丈八は案にたがひて、うち腹立つのみ術もなく、又斧を携へて指してゆくへは定めねど、加ふ島より七里西なる、大關村を過るとき、斧は忽地暑邪に中りて、いと難義に見えしかば、則ちこゝに宿投て、兩三日逗留す、こは六月のはじめのことなり。さる程に白木屋諸平は、妻とその子を喪ひて、白木の法輪寺へ詣づるとて、過七の逮夜毎に、大關村を過りしかば、宿のあるじ指して、彼見たまへ、關の堺橋なる造次饒商が、けふも又墓參りするにやあらん、命運高くて見るうちに、大賈になりたれども、盈れば必ず虧くることあり、七日が程に妻に後れ、子を喪ひていくばくの、財ありとも誰にか讓らん。さりとてよわる氣色もなく、誇りがなるは嗚乎ならずや。とあざみ笑へば丈八は、斧とゝもに走り出て、雯時諸平を見送りつゝ、彼が發跡たる故を問ふに、富むを羨み、勝すを猾むは、僻めるものゝ常なれば、宿の主人は諸平がうへを、人のいふ隨、わが聞く隨、いとつばらかに說知らし、果は笑ひに散動けり。さればこそあれ丈八は、諸平がうへを聞きしより、渠を謀らばやと思ふ

心つきにければ、獨りまくらを碎く程に、次の日一ッの計を生し、緯十二分にたくみ得たれば、傍に人なき折を見て、斧を邇く招きよし豫てはおん身もろ共に、加〻島に足を留め一期を過さんとおもひたるに、鵜の背と齟齬て、今更手口へはかへられず、往方を定めかねたる折、究竟の事を聞きつ。今われおん身を媒鳥にして、彼白木屋にかたらひ寄り、おん身色をもてこれを誘ひ、われ又利をもて誘はゞ、渠必ずおん身を容れん。おん身まづその家に入り、われ又後に彼處に入りて、内外より事を計らば、主人ひとりを臥させんとも、起さんとも隨なるべし。一旦權ひわれに著かば、彼人は嗣ぐべき子なし、目を閉ぢ息の絶ゆるに及びて、金銀財寶いへば更なり、曲突の灰毛の猫も扨子も、おん身取り、われ取らば、生涯驕り樂しむとも、なほ用ひあまるべし。豈快愉ことならずや。その計略は箇樣〻〻、如此なりと耳を引よせ、唇をさし着けて、緯詳に說き示せば、斧聞きてうち點頭き、おん身の外、仇し夫に添臥せんはこゝろにず、承引がたき所爲なれど、夫の爲には身を賣りて、河竹の瀨にたつもあれば、それらには增すかたもありなん、よしや思はぬ人の妻と、云はるゝとも御身に夤緣、ひとつ處に世を過ぐさば、行末までも憑しかるべし。ともかくも計ひ給へ。と應へをすれば、丈八は、その日の事、後の事、いふべき事、なすべき事、おちもなくよく誨えて、すべてその心を得させ、いまだ路費に竭きざれば、これを技倆の本錢にして、斧とおのが打扮つべき、衣裳なんどはしのび〳〵に、赤坂の驛にいゆきて、ふりたるを買求め、準備既に整ふ程に、斧が病著おこたりて、平生よりも猶すゝよかなれ

ど、丈八は事に假托け、大關村に逗留して、日毎に堺橋のほとりに行きけり。是は諸平が前のごとく再て遠く出づる日を、豫てぞしらん爲なるべし。かゝりし程に六月も、はや十六日になりにけり、この日は囮と諸太郎が、六七五七の忌日なれば、諸平は又墓參りせん爲に、朝とく宿所を立出て、白木の報輪寺へ詣でつゝ、晷些し傾く比、關の藤川と大關村の間なる、小松原まで歸り來るに、天俄頃に結陰、夕立の雨さと降りそゝぎて、雷さへおどろ〳〵しく、笠やどりせん檐もなければ、身ははや直と濡れながら、道次にさゝやかなる、地藏堂あるを見て、驀直に走り入り、霎時晴るゝをまつ程に、斧は豫て謀りしことなり、蟬の羽に似たる羅衣の、白かさねしたるをつぼ折りて、長き黑髪を結びさげ、左手に蠟塗の杖を衝き、右手には塗笠をさし翳し、

やんごとなき姫御達の、世に落魄し旅の空に、雨に逐はるゝ面持して、走りもあへず地藏堂の内へ入らんとして得も入らず、秋波にして諸平を見かへり、獨り簷下に立在みたる。年の齡は三十のうへを、夥超えたらんと見えながら、未だ萎るゝ花にはあらず、風に紊るゝ柳髪、雨に惱める海棠の、匂ひこぼるゝばかりなれば、諸平は膝のすゝむを覺えず、横にながめ縱にながめて、狐かと思へば尾も見えず、遊君かと思へば蒲闌けたり。痛しやこれぞこの、落人なんどいふものにて、國亂れ城陷り、其處ともしらず惑ひ出て、しらぬ旅寢をし給ふならん、ことゝはばや。とおそる〳〵、後方より袂を引き、卒爾には候へども、やんごとなき方ざまの、一人何處へゆかせ給ふぞ、倶しまゐらする忠義の郎等、某甲なんどいふ者はさむらはずや。雷などもおどろ〳〵し

地蔵堂
笠
貧夫
酒婦
賭
文八

地蔵堂
手
諸平

く、小歇みなき大雨に、端ちかなく立在み給ふ、御心の中推量れば、痛しくこそおもひ奉れ。おのれは此處より程遠からぬ、堺橋のほとりなる、賈人に候へば、御心おかるべうもあらず、いつまで立在み給ふべき。檐の玉水に裳濡れなん、おなじくは裡面へ入りて、憩はせ給へかし。と慰め申せば、引かるゝ袖を拂ひあへず、なよ〳〵として背さまへ、諸平が肩に倒れかゝれば、全驅忽地解くるがごとく、辱さに涙こぼれて、そが儘に抱き留め、堂内へ冊き入れて、下壇の塵埃かき拂ひ上座に据えまゐらせて、なほ叮嚀に勦りまをせば、斧はいとゞ羞はしげに、背向になりし袖垣の、間よりと見かう見て、憑しき人の言の葉に、名告るも面なき所爲ながら、妾は近き比までも、當國の守なりし、時頼藝の妹なり。兄頼藝武運微く、富田を沒落し給ひて、おん往方

定かならず、その時わらはは乳母子なる、無地野黒八といふものに供せられて、岐岨の山家にこの年來、味氣なき世を過ぐせしが、其處にすら住侘びて、黒八が申すに任し、近江路を心あてに、舊里ながら敵地を犯して、こゝまでは來つれども、暴雨に逐惑はされて、彼從者は何處ゆきけん、雷雨に魂消ゆるまで、ひとり立在む心ぼそさよ。しら玉が、何ぞと人の問ひしとき、露と答へんと詠みたりし、昔の人は色情ゆゑなれど、妾は思ふ郎もなし。まかせぬ世とは云ひながら、さかりの年を過ぐるまで、つましなければ旅衣、翌はいづこに隱笠、さして何方も途しらず、澳の海松布とよるべなきを、哀れと見よや市人、といひかけて目を拭ひもあへず、あな苦しや。と胸前へ、嫋やかなる手を推あてゝ、いと惱しげに見え給へば、諸平は慌忙きつゝ、おん

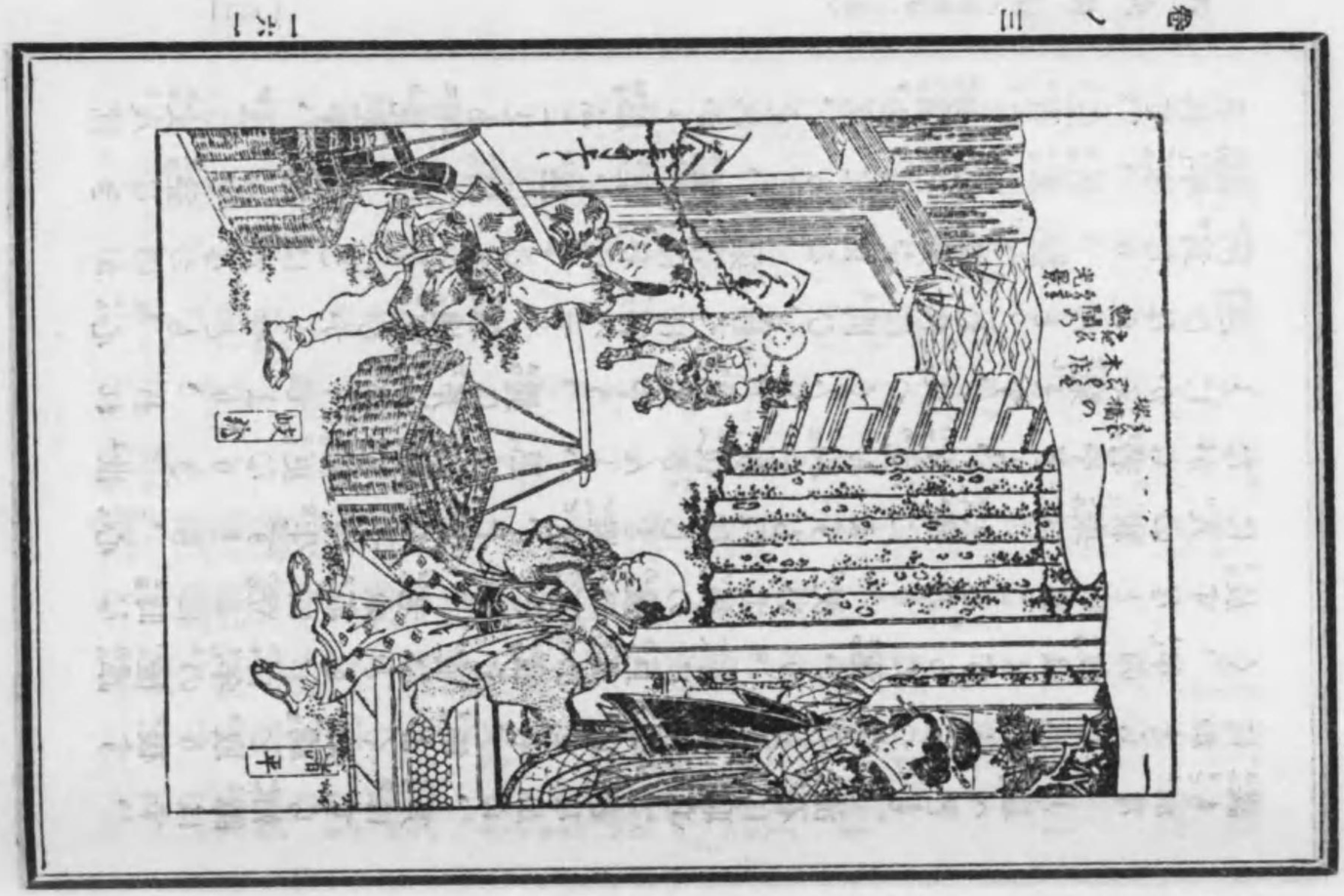
後方に立繞りて、背をやをら搔撫まゐらせ、世とて時とて痛しや、美濃の國司と仰がれ給ひし、賴藝朝臣の妹君、と名告らせ給へば心なき賤夫山兒、僕ごとき賈人も、いかで舊恩を忘るべき、御心つよく思召せ、おん身一つはともかくも、なるべきことに候。と慰めておん袖の、下より手首さし入れて、痞えを推下げまゐらすれば、留奇南の薫えならずも、いよ〳〵動く凡夫心、ありがひもなき妻をすら、喪ひし身は餓ゑたる猴の、桃を抱くに異ならず。無分別なる劇劑は、藪に鄰りし地藏堂、昨宵の夢想灼然、握手に出現し給ひて、諸願成就と思ふ折、丈八は簑の下に、皂草の腹卷して、十王頭の臑當に、藤柄の大刀を横へ竹子笠を額に翳して、南の方より走り來つ。地藏堂をさし覗きて、姫君こゝに在すかと、聲高やかに喚門ば、諸平はこれに驚かされ、身を隱すべき、隈もなければ、ます〳〵忙て忽地に、下壇を噎と滾落ち、敷石に腰を打して、足そらさまに弓になり、裳を面へ引被て、暫時は起きも得ざりけり。當下斧は笑ひを忍びて外面を打眺め、無地野黑八參りしか。といふに丈八遽しく、笠投棄てすゝみ入り、思ひがけなき驟雨に、雨衣の準備も得せねば、簑笠求め進らせんとて、些引さがりたる隙に、姫君のおん行方をしらず、驚き忙て彼此を、索ね奉るに程もよく、この處に坐する事、微臣が歡びこれに過ぎず、雨もやゝ霽候へば、いざ給へ。と急がしまうせば、斧は頭をうち振りて、さな急がしそ、迅雷にいたく痞えの發りしがば、一歩もなほ運びがたし、寔に人に人鬼なく、おなじ宿りにそれなる市人、いと叮嚀に妾を勦り、介抱大かたならざりき、被物とらせよ。と仰するに力を得て、

諸平はやうやく身を起せば、丈八は佶と見て、何處の何人と知らぬども、一樹の蔭も他生の緣、故ありて世を忍ばせ給ふ、姫君のおん病苦を、看病まゐらせしこそ神妙なれ。といへば諸平は額を着き、僕は堺橋に、白木屋と呼ばれたる、賈人に候へども、近ごろ俄に發跡て、地方久しきものならねば、しろしめされぬ事もあるべし。しかりとも、前の國司の妹君と名告らせ給ふを、いかで情なく見奉るべき、おん供の方さまへ、遞しまゐらすれば後やすし。といふに丈八うち點頭き、姫君のおんうへを、はや知られたれば匿むに由なし、斯ういふは姫の乳母子、數ならねども無地野黑八、年頃冊き奉り、岐岨の山里に忍ばせ奉り、浮年月を送ると雖も、御運開かるべうもあうず、近江なる觀音寺の佐々木家は、舊緣ましませば、廼姫君を勸め奉り、佐々木家を憑まんとて、しば〳〵その事を申すといへども、姫君是を諾ひ給はず館のおんゆくへ定かならず、世になき人になり給ふと、告ぐるものもあるけるに、今更獨り阿容〳〵と、觀音寺へやはゆかん、尼にならんと宣ふを、漸くに拵へて、こゝまでは倶し奉りしが、折わるく中途の病氣、さればとてこの處に、なほ在して冷え給はゞ、いよ〳〵重らせ給ひなん。といふに斧は眉うち顰め、やよ黑八、今乂わりなく勸むるとも、近江へは赴きがたし、とてもかくても埋木の身のなる果も佛緣薄くて、尼になること稱はずば、名を匿み迹を埋め、賤のをのこに伴はるゝとも、恥かゞやかしく佐〻木家へ、身をよせんよりますものを。と吱き給へば丈八は、數回嘆息し、世が昔にてあらんには、名たる武將の北のかた、と冊かれ給ふべきに、おん年ざかりを過ぎ給ふま

で、定る郎も在さねば、賤しきものゝ妻になるとも、世間やすく送らんと、思召すこそ痛しけれ、かくまでに宣はするを、わりなく彼處へ倶しまゐらせんや、人ありて姫君を、且く舍藏奉らば、某一人觀音寺へ赴きて、佐〻木殿へ危急を告げなば、或は千金二千金、借受けんこと難きにあらず。その金をもて姫君の、婚緣を募めんものを、これも又黑八が、身一つにては思ふに任せず、世に憑しき人もがな。と獨語ちつゝ利に誘引へば、諸平は思はず進み出で、物數ならぬ賈人が、斯う申さんは嗚呼なれど、御身が近江へ赴きて、金子調達し給ふ程は、某身にかえ命にかけて、姫を與り奉らん、この事許し給はんやと、問はれて丈八大きに歡び、實に潔き和殿の仁俠、武士も及ばず天晴憑し、物いふことも假初ならぬ、誠心氣立に顯はれたれば、われ露ばかりも疑はず、心やすく近江へいゆかん、姫の御心いかにぞや。と問奉れば莞爾とうち笑み、憑すくなき妾としりつゝ、伴はんと云はるゝを、いかでかは推辭むべき、喃諸平とやらん、そなたの宿所は何處ぞや、子ども夥產したる、家刀自ありや。と念入れて問へば諸平は頭を搔き、十年あまり病臥したる、女房の候ひしが、一子さへにおなじ比、身まかりてはや日ごろ經たり。經營の爲使はるゝ、小厮兩三人候へども、大凡女の子といふものは、牝猫だも候はず。と申上れば又莞爾と、うち笑む顏を袖もて掩ひ、夫聞きておちゐたり、必ず見はなち給ふな。と婀娜言葉は隱口の、初髻結にあらねども、結ぶ緣しは詐欺の、黃金の罠に色の餌食、欲にはぬかる雨後の道に、草葉の露といと深き、伎倆なりとは竟に曉らず、諸平はいよ〻信だちて、人の怪しむこともや

とて、途にその日を暮しつゝ、關は名のみに戸鎖せぬ、小川の宿所へ夜をこめて、件の二人を伴ひけり。却説丈八は、白木屋にその夜をあかして、甘く諸平を相語課せ、金子調達の爲、佐〻木家へ推參すとて、今夜より更に旅だちの用意してその明朝、西をさして出でしより、百日あまりかへり來ず、されば斧は情をもて、只顧諸平を誘ふにぞ、臥房の數もかさなるまゝに、松尾山の千代までも、離れはせじとかき口説かれ、かくは諸平は愁いに、隱すとすれど人もしれば、亡妻囮が遺せし衣を、そがまゝに斧に被せて、賈人の女房に造替え、まづ試みに庖湢のことを任せけるに、節儉を旨として、かひ〳〵しく費を省き、正首ならざることもなければ、ます〳〵これを愛歡び、只いつとなく妻と呼び、良人と殲眉せ、土庫の鍵なども、斧が腰に着けさして、金錢の出納まで大方は任せしかば、牝鷄忽地晨して、斧が權威主人に超るを、小厮等は譏りつゝも、絶えて頭を擡げ得ず、丈八はこの時まで、ふかく近鄕に躱れてをり、今は早やよき比なりとて、いたく勞れたる面持して、白木屋へかへり來にければ、諸平はこれを訝りながら、閑室へ呼び入れて、斧とゝもに、團坐しつ。さて佐〻木家の消息を尋ぬるに、丈八頻りに頭を搔き、某觀音寺の城へ參りて、姫君零落し給ふよしを、叮嚀に聞えあげ、なほ愁訴の趣を審に演べんと思ふかひなく、多賀、高島の諸老臣、却つて孤疑の心ふかく、こは必ず隣國の間諜者なるべしとて、矢庭に某を生捕らせ、獄舍に繫ぐこと九十餘日、鬱憤腸を斷つと雖も、愁訴の路竟に開けず、徒に死を俟んよりは。と一夕風雨に紛れつゝ、辛く獄舍を脫れ出で、立かへりて候と、實し

やかに述べしかば、諸平は忽地望を失ひ呆れること半時ばかり、斧も本意なき面持しつゝ、近江の事は恨むるとも及ばず、されば今こゝを出て、又何處へか赴くべき。そなたにはまだ告げねども、主人が情に絆されて、既に此身をまかしたり、心ず叱り給ふな。といへば丈八嗟嘆して、心あてにしたりける、佐〻木殿にすら容れられねば、こゝより外に憑む蔭なし、誠に夫婦の情縁は、貴き賤しき差別なし、いと似つかはしく見えさせ給ふ。と壽詞を述べしかば諸平は獨り苦笑して、丈八を勞ふのみ、出ていねとも云ひかたければ、已むことを得ず店に据えて動靜云爲を試みるに、武士の果とはいふものから、賈人のうへにさかしく、算筆に利潤を勘へ、損益を辨ずることは、諸平が及ぶ所にあらず、いと正首に見えしかば、生馬の目をも拔き、佛の箔をも剝ずといふ、諸平なれども竟に曉らず、色に惑ひ、才に愛て、古狸等に甘く謀られ、斧はさらなり丈八は、わが店の白鼠、彼なくてはといよいよ用ひて、主管と稱へつゝ、店の事を任せしかば、丈八斧はこゝに至りて、豫ての計較全く成就し、陽にはいよ〳〵誠心を見して、陰にはます〳〵殘毒を逞くし、物を掠め情を盜みて、あるじが家になき折は、密會こと度かさなれども、人の告ぐべきことならねば、諸平はこれを知らざりけり。かくて又、二年あまり過ぐす程に、諸平は只何となく、斧丈八等が擧動心得がたきこともあれば、こゝに些しは醉醒て、彼等が上をよく思へば、前の國守の妹君、乳母子なんどいふものゝ、落魄たるにはあるべからず。されば世にいふ筒齋虎落とかいふものに、ならずやは。と疑念發りて、竊にこゝろを着けれども、既に斧に惑は



されて、愛着に眼翳めば、それかと思ふことも得見えず、現に丈八は此年來、活業に心を得たるに、猛に渠を逐ひ出さば、損ありて益なき所爲なり。疑へば鬼を見る、渠等に科はなきものを、こは皆なおのが迷ひならんと、われに問ひ、われに答へて、忽地思ひかへせども、心とにかく樂まず、又つく〳〵と思ふやう、曩に斧を娶りてより、われながら若やぎて、女兒お駒を取復さんと、思ひし事も猶更なりき。世に人の親染は、夫婦にますものなしと雖も、七人の子は生すとも、心放すなといふことあり。況いて後の後の妻をや、老の坂は登るに時なく、年の波はよするに速かり。家に巨萬の錢を積むとも、百年の後誰にかとらせん、とにつけてもかくにつけても、術よくお駒を取り復す謀もがな。と思へども、流石に恥ぢて妻ながら、斧にすら相譚はず、

獨り胸をぞ苦しめける。時に天文十七年、春二月、稻葉山の城中には、齋藤右近太夫義龍、一旦家隷郎等を召聚へて、民を利し國を富ます策を問はるゝに、群議互ひに優劣あり。當下義龍は左右を佶と見かへりて、去ぬる天文十六年秋九月、先君道三卒去の後、われ家嫡として箕裘を承嗣ぎ、幸にして、武名を墜さず。しかれども突戰防禦の軍議に休暇なく、豫て思ひしことを果さで、又この春を迎へたり。傳聞く、不破石津の愚民ども、五月五日に子を生むときは、忌みてこれを棄つるものあり、不慈不仁の至りならずや。よりてわれ、儒臣に命じて、和漢の例を考索しに、昔唐山には、をさ〳〵かゝることありけり。齊國の田文は、五月五日に生れしかば、父田嬰これを忌みて、孕むことなかれと云ひしを、その母秘密に養育せり。田文總角の比、はじめ

て父に見參し、五月五日に生るゝ子を、などて不祥とするにやあらん、こゝろ得がたし。と問ひしかば、其父答へて、凡そこの日に生るゝ子身の長戸口と齊しくなるときは、必ず親に利なし、故にこれを諱むといふ。田文聞きて、人は命を天に受く、いかでか命を戸に受けん、もし、戸に害あらば、その戸を高くせんに、孰かよく此に至らん、嗚呼なることに候はずや。と信だちて申せしかば、父やうやくにこれを曉りて、初めてその子の賢なるを知れり。さればこそあれ田文は、當世に稀なる賢人にて、孟嘗君に封ぜられ、富貴を人臣のうへに極めて、大いに家を起したり。この餘、王鳳、王鎮惡、胡廣なんどいふ賢人、みな端午に生れしかば、或は辛くして長となり、或は棄てたる父母後悔して、更に親子の名告をせり。是によりて推すときは、五月五日に

生るゝ子を、絶えて不祥といふべからず。却つて賢人貞女多かり、生死は時を擇むによしなし。生るゝもの死するもの、吉日をえらむともいかで心に任すべき、はやくこの旨を令しらし、向後端午に生るゝ子を棄つることを禁ずべし。加旃、子を棄て後悔し、とり復さんと思ふものは、棄てたる年の多少に從ひ、養育の爲費す處を、養親に贖ひて、その子を舊へ乞取るべし。かくてもなほ法度を犯して、不慈の行ひするものあらば、そのたびは赦しがたし、爾達よく心を得て、邊鄙といふとも漏すことなく、下知せよ。と仰せしかば、稲畑牧村の諸老臣、感涙を拭ひあへず、微妙き御綻を承り候ものかな、君は民の父母として、仁慈の御心つかせ給へば、御武運長久、御子孫繁昌、疑ひなく候と皆諸共に祝しつゝ、此日の衆議は果てにけり。此事後に、隣

國に聞えしかば、心あるも心なきも、掌を拍つて稱賛し、抑齋藤義龍は、父道三にいやまして、心ざまの悍きのみ、智術に疎き大將なれども、よき家隸を畜たりけん。かくのごとき仁政あり、嫚りがたしと云ひしとぞ。されば此一事をもて、敵軍堺を犯すことなく、その國且く安かりける。かゝりしかば白木屋諸平は、件の嚴命を傳へうけ給はりて、あまりに事の歡しさに、いまだお駒が本末を、斧等に告ぐるに及ばず、俄頃に樽肴をゝ整へて八貫百文の錢と共に、是を一荷にして小厮岐藏に扛擔はせ、羽織の紐を結びあへず、草履を横ざまに穿きながら、頻りに岐藏を急がし立て、堺橋より東の河原へ、飛ぶがごとくに走去るにぞ、斧丈八等は、その故をしらず、こは何ごとのいで來し。と問ふいとまだになかりしかば、且つ驚き且つ呆れ、これは

〳〵とばかりに、店の框に翹ちて、腮を擡げ鼻の下を引伸し、後影の霞むまで、惘然として目送りけり。

卷之四

朝煙霞

斧丈八等は、あるじ諸平が忙しく樽肴を齎して、小川の向ひへ走去りたる、その故をしらざれば、或は訝り、或は呆れて、これを待つこと半日ばかり、日もはや西に沈むころ、諸平は一挺の轎を舁し、岐藏を將てかへり來つ。滿面に笑みながら、轎をそがまゝ横ざまに、鄽の框へ著けさして、垂れたる蔺簾を揭ぐれば、裡より二八ばかりなるいと艶闌けし未通女子が、目を泣腫して立出でたり。當下諸平はにこやかに、斧等を見かへりて、嚮には心いそしさに、緣由を告げざれば、訝しく思はれけん、そは緩やかに說きしらせん、丈八は足を取らして、

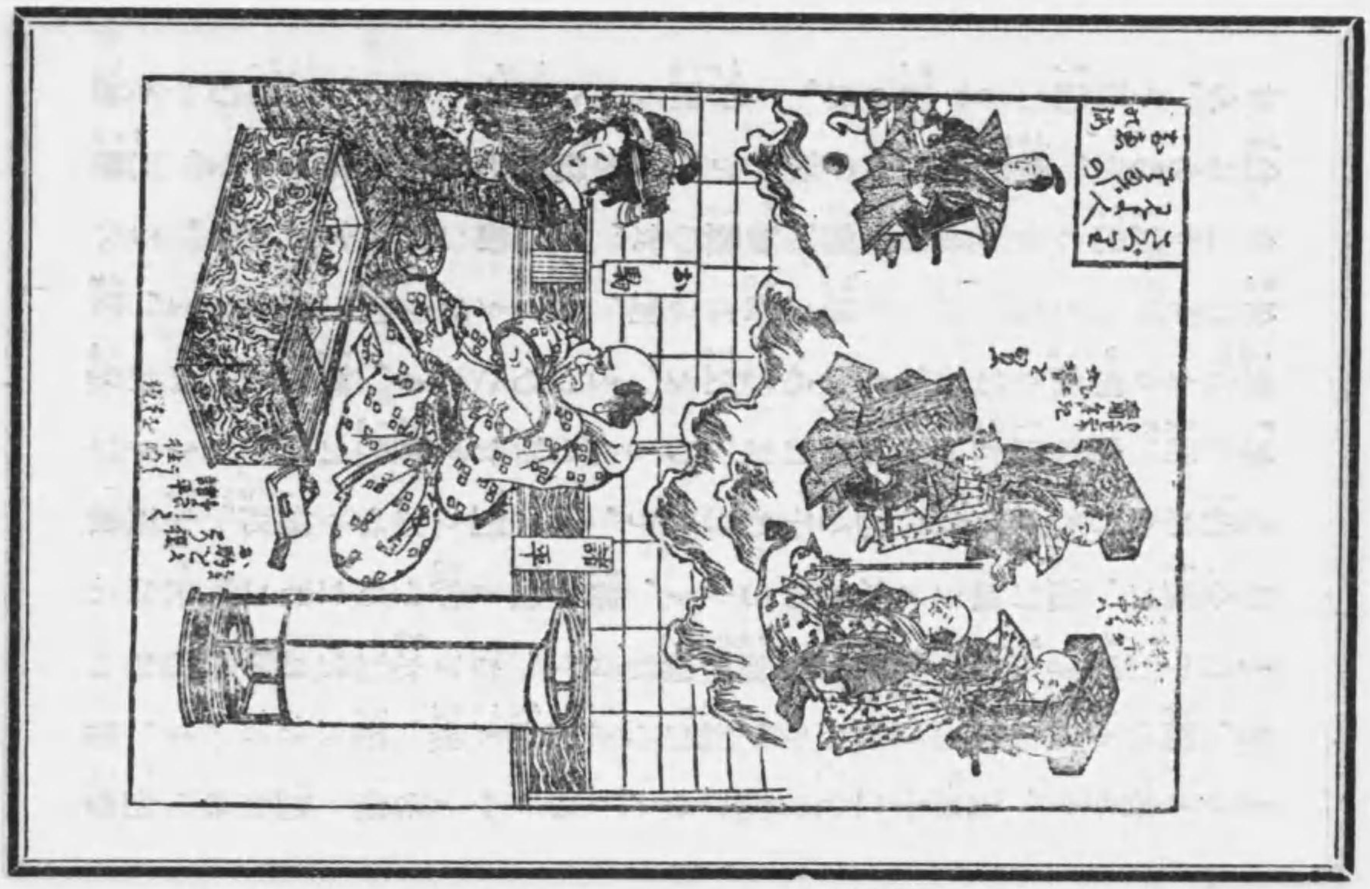
轎夫をかへせよ。橋只ひとつ渡すとて、二百錢は過ぎたれども、水ばなれが惡くしく、いたく時を移さしたれば、清水の舞臺から落ちたりと思ふのみ、乞はるゝ隨にとらせかし。岐藏は樽をも肴をも、そがまゝ庖偪へ扛入れよ、油斷して猫になとられそ、いざ此方へ。と正首に浮かぬお駒を急がして、奥庫遠く鍵の手に、中庭遶る便室の障子を開けて誘引つ。さはれ斧も丈八もとにかく心得がたくて、迭に目と目をうち注し、軈て主が尻につきて、おなじ圓居に入りしかば、諸平は殊に誘りかに、やよ斧、斯う事成りては丈八にも、なか〳〵に匿すに及ばず、吾いと貧しかりしとき、前妻囮に產したる、女子一人ありけれども、妻は產後に身まかりて、養ふ術もなきまゝに、襁褓の中に棄てしかば、この川の前面なる、尾花才作に養はれ、その名を駒と呼ば

れつゝ、今はや二八のをとめになりぬ。しかるに吾儕發迹て、貨財に物は缺ねども、只一人なる男兒すら、あさましく世を早うして、子寶のみ心に任せず、むかし悔しく思ふ折、ゆくりなき守の嚴命、端午に生れし子を諱みて、棄つることを禁ぜられ、もし子を捨てたるものありて、先非を悔ひて今更に、取復さんと思ふもあらば、此度は格別にその咎を宥めらる、棄てたる年の多少に從ひ、養育價を形のごとく、養親に貲ひて、廼ちその子を乞ひとるべし。と令しらされし天の賜、かゝる便宜を得ざりせば、わが女兒にして女兒にあらぬ、女兒をいかで女兒にせん。善はいそげ、と忙しく樽肴を齎しつ、橋むかひにて轎を備ひて、やがて尾花が宿所へ赴き、守の仰せを笠に著て、いひがたきことを述ぶ、富婁那が辯もて說きしかども、渠奴も亦さるものなれば、一條では承引かず、守の仰せに負くにあらねど、正しき親子の證據なくては、さりとても信じがたじ、證據やある。と詰られて、吾儕騷がず莞然と笑み、いはるゝまでも候はず、某女兒を棄てしとき、裾に牧馬の模樣ある、夾衣を著せたりし、是その證據一ッなり。これのみならず彼袷の、襟紐に結び添えし、護身袋には臍帶と、金山彦の神符を納れたり、その證據二ッなり。お駒が左右の乳の間に、大きやかなる黑子あるべし、某が胸毛の中にも、又かゝる黑子あり、これぞ正しき親子の證據疑ひ給ふことかは。と襟かき披きて見せしかば、才作否むに辭なく、縡やうやくに就るものから、何國の浦でもとにかくに執念きものは女子なり。彼才作が女房は、名を小桔梗と呼ばるれど、時には鬼薊、言葉を殊に鍼目立ち、貧しきときは子を棄てゝ、知らず

顔して孚ませ、今しあはせのよき隨に、恥をおもはず親と名告りて、取復さんと云はるゝとも、守の御心ならざりせば、いかで輙く承引くべき。そを恐みて孚はぬ良人を閣きてなか〳〵に、いふべうも侍らねど、假初に畜ふ犬猫でも、狎れては可愛きものなるに、況いてやこれは襁褓より、養ひ取りて十六年、人なみならぬ右の手を、人なみにせる夫婦が丹誠、養子あはせにわが子の婦と、幼稚よりいひ知らし、時を待得てこの春は、妹伏の盃させんとて、準備も豫てより、卜たるその日も遠からず、けふと定めてまだ染めあへぬ、齒皂はじめの鐵漿筆にも、かき盡されぬ恨みのかず〳〵、是はかう、彼はかう、と傍痛くかき口説けば、女子ごゝろの流石にて、お駒は情由もなくばかり、謂れを聞けは才作が、一子なる才三郎と、婚姻の日の近づけば、けふ

鐵漿そめと祝ぐ眞中、思ひがけなきことなれば、さもあるべき筈ながら、才作には怨あり、はじめは知らで渠奴が門へ、子を棄てたるすら悔しきに、美濃の尾山の古墳にて、渠奴が必死を救ひしこりあり。緣由は箇樣〳〵と、一角がうへ、尾花がうへ、わがうへさへに落もなく首尾を說きしらし、お駒は今はや人となりて、生心のつく頃なれば、彼となく此となく、遺憾き事もありなん。さはりとも、尾花夫婦は原是他人、世に亦おん身が夫といふは、才三一人に限らんや。吾儕彼處へいゆきしこと、今五七日遲りせば、父が古主の仇と得しらず、おん身は遂に阿容〳〵と、才三郎に妻はされ、後悔こゝに立ちがたからんに、婚姻の準備に、齒を染めさせんとしつる今日、折もよくわれゆきて、元のしら齒で取り復せしは、こよなき親子が幸ひなり。さればこ

そあの小桔梗が、恨みつ泣きつ口説きにけれど、禁めあへぬは守の嚴命、濡手であはれ言葉數、云はで取り得しわが女兒、將てかへらんと思ひしかども、十六年養はせしに、心強くも得ならねば、尾山の墳にて才作が、われに獲させし錢を返し、養育價も形のごとく、贖はんとて齎せし、樽肴を安排べ、八貫百の錢をとり出て、これらのよしを述べも果てぬに、才作頭を左右へうち掉り、貯祿薄き浪人と、侮らるゝかは知らねども、金錢をもて人に說く事、そは賈人のうへにあるべし。われ初めより利の爲に、棄子を拾ふて孚まんや、十六年の養育も今日一日に緣竭きて、思ひし事の仇になれるも、皆是天のすな所、守の命せは背きがたし、素よりしらで育てしお駒、故なく其許へ返すにあらねば、酬ひを受けんよしもなし、然るときは樽肴、この錢も又何にかはせん、そが儘にもて歸りね。と敦圉あらく回答へつゝ、受納むべき氣色はあらで、屢泣妻をいそがして、いと綺羅やかなる衣どもを、三襲あまり取出させ、是はお駒が祕藏の衣、この儘に取らするなり。この外にも何にまれ、欲しと思ふ物あらば、心くまなく聞えしらせよ、翌此方より贈遣りなん、さのみな泣そ。といひつゝも、禁めあへぬは忿怒の泪、彌の腹立がわが爲には、いとあひがたき饗應にて、ゆくりなき得はつけども、親の心を子はしらで、うち泣くばかり辭別、才三郎は今更に、鰕に離るゝ水母のごとく、彼も此も物いひたげに、云はんとしては得も云はず、目には涙の磯ならで、さて水ばなれがわろけれど、關の小川の名にしおひて、諺にいふ出船入船、留めもあへず、留まりも得せず、首尾十二分で將てかへりぬ。やゝお駒、渠はわが後妻



八犬傳　第（さ編十二回）　一十六

なれば、御身が爲には則ち母なり、斧も實の女兒と思ふで、くまなく誨え給へかし。凡そ世帶の根繼には、齎らし多き女婿こそよけれ、多寡のしれたる浪人の、婦にならぬは一期の幸ひ、金の草鞋で尋ねずとも、才三郎に百倍せし、佳婿は幾もあり、さはあらずや。と誇りたる左右を佶と見かへれば、斧は直と呆れ果て、丈八と尻目をあはして、いとゞいぶせく思へども、氣色には顯はさず、わが伏に女兒あるべしとは、今日までも知らざりき、人の齡は限りあり、千〻の黄金を積めばとて、子にます寶はなき物を、かくまで愛たき事は侍らず。親となり子とするも、過世の業因なるべくば、隔つる心侍らんや、さて艶麗たる縹緻かな、妾は腹も痛めずに、かゝる女兒を儲けたり、父御にも、ます歡びを、猜し給へ、と叮嚀に、人目ばかりの陽笑貌、底意ひとし

き丈八も、諸共に慰めて、壽を述べしかば、お駒は袖もて目を拭ひ、凡そ生きとし活ける物、みな父母はありながら、實の親をしらざりし、わが身一つの味氣なさ。譬んよしもなかなかに、去歳に今歳はおよすけて、愚なる身もとにかくに、やるかたもなき物思ひ、神に佛に願言の、叶ふて今日はゆくりなく、實の親の親里へ、立歸る嬉しさと、又悲しきはこの年來、孕まれたる二親は、實の親と敵どち、幼きより言號られ、振わけ髪も肩過ぐるまで、諸共に生育し、彼人ざまと中絶えん、空結びなる妹と伏が、いまだ枕はかは島の、水の行方とわがうへと、果敢なきものに侍るかし。といひかけて又伏沈みぬ。かくて斧丈八等は、なほさまゞ〻に慰めて、お駒に衣を被かえさせ、物食はしなどすれども、果敢〻しくは箸も得とらず、才三郎が事をのみ、絶え

て忘るゝ隙もなく、今日と暮し、翌とあかせば、千年をおくる心持しつ。人傳ならで身の憂苦を、言告げやらん由なさに、日毎に矮樓へ登りつゝ、川一條のあなたなる、尾花が軒をうち眺め、河原面の便室へ、もし彼人の出づるやと、心彼處に、身はこゝに、實に人界の天河、年に一度の逢瀬だに、なほ憑まれぬ袖の雨、濡らすも惜き形見の衣、二つ三つ四つかさね着に、あまれるを只かき抱き、潸然として泣きにける。歎きはいとも理りなれ、件の袿は才三郎と、婚姻の晴にとて、養母小桔梗が手づから縫ふて取らせたる、一對の小袖にて、今は稀れなる物と聞えし　八丈絹を黄綟にして、紋には桐、裾には菊に蝶をなん染めたりける。さは天文の頃迄も、八丈絹と唱へしは、八丈島より絨出す、島絹の事にはあらず、尾張より出す絹に、その長八丈なるありて、これを八丈絹といへり。大約絹の長を定めて、二丈六尺にせられしは、いと後のことにして、この頃までは絹の長短、おの〳〵その差ありと雖も、八丈絹は殊に長かり。こは播磨の飾磨紺、武藏多摩河の調布、陸奥の信夫捐、陜布の細布などに齊しく、都鄙に名だゝる土産なれども、鄰れる國を胡越のごとく、彼を擊ち、これと鬪ふ、戰國の最中なれば、美濃人にして尾張の絹を、購めんことは輙からねど、其を獲たるにも又故あり。小桔梗が父、牧村衞門は、去ぬる天文十五年の六月に、稲葉山にて身まかりき。よりてその頃、長男牛之介通長より、妹小桔梗に贈りたる、父が像見の衣裳の中に、彼絹一卷あまりあり、こは今得がたき物なれば、そが儘弃めおきたりしを、此の春子どもが婚姻の、晴小袖に取らせんとて、廼ちこれを三つに裁ちて、子供

等が好みにまかせ、おなじ色に染めたるを、一面は才三郎が小袖に仕立て、二つはお駒が袿にせよと、その色は黄綟にて、紋も模様もかはらざりけり。かくまで準備して、二月廿六日は、稀れなる黄道吉日なり、この日は必ず妹と伏の盃をさせんと思ふに、今ははや幾日もあらず、お駒は先づ齒を染めよとて、一日小桔梗は、鐵漿壺、漿子、角楪なんど大かたに執整へ、八丈絹もて製たる、お駒が袿の二つあれば一つは今日の晴にとて、刺著苧取りて被せたる折、思ひもかけず一件のこといで來て、諸平にお駒を取復されし、その日その時才作は、渠が被がえの爲にとて、新らしき衣三襲あまり、齎らして遣はせし、これ早や像見になりぬとは、豫てよりしるよしあらねど、いろ〳〵なる衣の中に、仁田山紬の裙のあたりへ、小褄木綿を綴りよせしは、その

初め才作が、心をこめし賜にて、これをお駒に縫はせし頃、小桔梗みて云はせしやう、斯う異やうなる綴衣を、おん身が衣裳にせよと云はば、怪しうも思ひやせん、しかりともこの衣は、綾綿にもいやましておん身が爲には愛たき物なり。これ見給へ、裙に綴りし浬色の、栲に牧駒を染めたるは、はじめ御身がわが門へ、棄てられし時の襁褓なり。模様の駒を名にとりて、則ちお駒と呼びたりし、紬と木綿はその品かはれど、綴りよすれば衣となる、おん身も亦かくの如し。親ならぬ親に孚くまれ才三郎が妻とならば、是や不思議の緣の絲、より合した る父子夫婦、心の誠に鍼留めして、隔つる心をもち給ふな。といひ諭されし事もあり。さればお駒は今さらに、彼を思ひ、是を思へば、見るも哀しき像見の衣、今は仇なれ是なくば、忘るゝ隙もあらましを、

けふも日ぐらし樓に、泣きくらすのみ慰めかねて、又つく〳〵と思ふやう、心づよきも事による、云ひがひなきはわが大人なり。慈みましまさば、はじめの如く彼人に、配し給ふが親がひなき、貧しき時に棄し子を、孚くませたるその人の、恩を仇なるなされやう、吾儕に深き約束の、ありと知りつゝ露ばかりも、などてや思ひやり給はぬ。事を好みて彼人は、古主の仇と憎さげに、罵り給ふした心、あればある隨なほ飽かで、金を婿なる婿えらみ、物體なしと思へども、親を恨むもこの身の惡業、實の母御前在さば、又せん術もあるべきに、かゝる歎きを彼ぬしは、知らで憎しと思すらん。不和と不破とは名に響く、關の小川も名詮自性、留められたる身は甲斐なくも、人傳ならで思ふ事、唱歌に寄せてしらせんとて、獨り心を筑紫琴、膝のあたりへ引寄せて

も、涙に哽せて聲立ず、仇浪のみぞかき鳴らす、十三絃の春の川、琴のしらべにひかれてや、來るとも知らずわが背後に、立つ人あるを見かへれば、日來戀しきその人なり。思ひかけねば嬉しさも、八しほにましてなか〳〵に、問ふべきことを得も問はず、こは〳〵如何に、とばかりに携著かんとしたりしかば、才三郎はかいやりて、呵〻と冷笑ひ、定めなきは人心、かゝる恨は事ふりにたれど、實の親に伴はれ、一旦その意に任するとも、養育の恩を思はず、妹脊の緣さへ仇にして、日來ふれども音耗せず、世は春ながら秋風の、立つとしなればかくまでに、畜生にも劣れるもの歟。そは亦その故なきにもあらず、汝が父諸平は坊賈の、富誇るのみ心穢く、信義に疎く、利に耽り、恩を得知らず、恥を思はず、守の仰せを炭にして、なほさま〴〵に云ひ拵へ、

取り復せし女兒の爲に、婿を擇むと世の風聞、親に劣らぬくさり女が、これ見よがしと樂しげに、琴搔撫す面の憎さよ、斯う犬猫に等しき奴に、兎の毛に結ぶ露ばかりも、心を遺して潛びやかに、またくこゝへ來つるにあらず、痛しきはわが母御、こゝと彼處は程近きに、音耗なきは心得がたし。腹こそ借さね襁褓の中より、養育したる恩愛は、才三郎と異ならぬ、お駒は別の哀しさに、病煩らふてやあらんずらん、折もあらば訪へかし。と宣はするに默止がたく、竊にこゝへ來るものから、父にはさせる命せを禀けず、諸平が心も知りがたければ、庭門より潜び入り、孫廂より攀登りて、汝と面をあはする事、才三郎が本意にはあらず、いふべき事もこれ限り、不義にして富榮ふるとも、物の報ひの有べくは、長き月日の後を俟て、みづから思ひしるべきぞ。

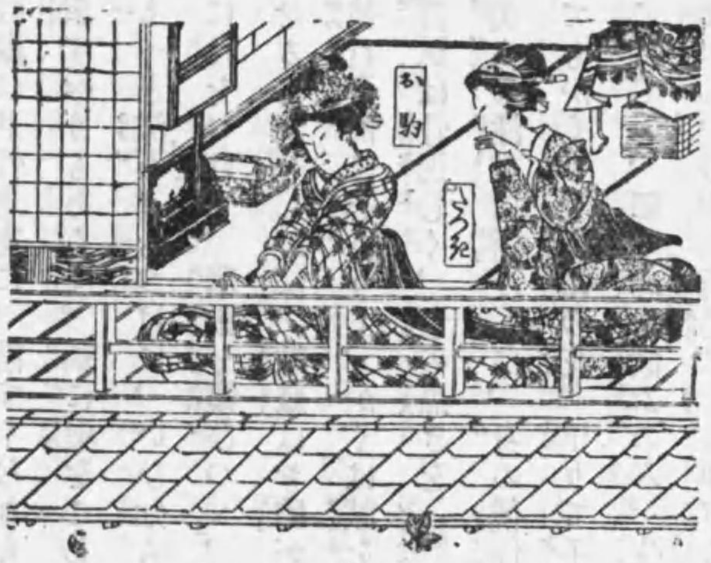
と罵りながら礫と蹴る、裙に携るも力なく、引起されて目を拭ひ、怨み給ふはみな理り、父はとともあれわが心、關の小川の瀨はかはるとも、いかでかかはり侍るべき。實の親といひながら、恩愛は只きのふけふ、生ぬ親でも十六年、親愛ふかき方ざまの、しかもその子はわが夫、いづれ疎はなけれども、音耗ならぬことよしを、いへば流石に親の非を著はすに似て不孝なり、云はねば養父へ不孝なり。今の歎きをしらずして、愬いに歸りたる、浦島が子の恨にも、まして悔しき玉匣、二人の親へ身一つを、よし甲斐なくも贄にして、死んと思ひ決めつゝ、日影まつ間の露よりも、脆きは人の命とも、知らでや父はわが爲に、いそがし給ふ婿がねの、誰を渠をと生憎に、その商議を聞く毎に、耳は刃につらぬかれ、胸のあたりを裂かるゝ思ひ、勸解も推辭むも片意地

の、親には勝ん道もなく、泣きにたちしはいくそ度、慰めかねてつく〳〵と、瞻むる空に春の雁、彼故事に違はずば、筆に云はして如此如此と、言告げやらんよしもがな。けふは何して暮し給ふ、わが脊は彼處に在すめり、こゝより軒は見えながら、川一條を萬里の灘、かくまで思ひ沈む身を、逆さまごとなる怨のかず〳〵、罵られても、撃たれても仇には受けぬ郎の拳、撃ち殺されんは本意にこそ。只願はしきは疑を、ときてゆるすと一言に、笑顔を見せてたまはらば、そは千僧の讀經にも、三尊佛の來迎にも、まして尊き冥土の裏、憑むは二世の契りのみ、哀れとは覺さずや、心づよし。とかき口説き、夫の膝に伏沈む、涙は黄む八丈の、長き袂を絞るまで、はなれがた見の衣の色、あやなき喞言に思はずも、才三郎は嗟嘆して、やをら背を搔捺り、さ

もあるべうは思ひしかども、日來經るまで信なければ、疑ひも一しほまず、われはともあれ二親の、腹たて給ふは理りならずや。心にくきはあるじが貪慾、そは咎むるとも云ふがひなし、只痛ましきは御身が苦勞、絆の趣つばらかに、父にも母にも申すべし。實に煩惱の塵の世の、塵し積りて山鷄の、雌雄峯上を隔つるとも、緣し竭きずばあふ夜もあらん、よしなき歎きに時を移して、人にしられば浮名やたゝん、思ひ細りて病み給ふな、はや退らん。といひ敢へず、立まくすれば忙しく、やよ待ち給へ、いふ事あり。と携る袂を振拂はれ、再び携るを撞退けられて、吐嗟と一聲叫びつゝ、身を仰さまに欄干に、倒れかゝりて矮樓より、落つると思へば假寢の、夢の浮橋中絶えて、忙然として覺めにけり。かゝりける折、小厮岐藏は、あるじが例の性急に、挽

殘したる河岸の筏を、けふ日の中に取り入れよ。と云はるゝにうちもおかれず、やうやくにその綣果て、半日餘り勞せし、骨を且く休めんとて、伏したる杣木に尻をかけて、領の汗を拭ふ折、颯にやあらんずらん、川の向ひに塵埃起りて、颯と吹く風と諸共に、その形狀蟬に似て、蟬よりもちひさげなる、蟲閃ふと飛來つゝ、岐藏が胸に直と著くを、搔落さんとする程に、忽地見えずなりしかば、思はず向上る樓に、夢の住方を思ひやる、お駒と面をあはしけり。當下お駒はやうやくに、われにかへりて胸撫でおろし、果報なきは只夢にして、世に憑まれぬものながら、心にかゝる郎の怨み、やしなひ親はいとゞしく、うち腹立てをはすらん。夜川の風の便りにも、かくありけりと吾が上を知らせまほしく思もへども、憑しき使もなし、大かたの小厮の中に、

岐藏は其性老實に、辭すくなきものなれば、相譚ふともそのことを、漏すべうもあらず。縞に渠をこしらへて、機密の使をさせんずと、おもへど流石うちつけに、いひ知らすべきことならねば、是よりよろづに目をつけて、擧動を窺ひつゝ、事に假託て、しのび〳〵に物をとらせるなどせしかば、岐藏はお駒が本心を、いかでかは知るよしあらん彼君吾儕に心ありて、かくは誠を見せ給ふ、われ業平に肖ざれども、當風は骨逞しく、色の黑きを趣ある、男兒とかいふなれば、しらず美人の注文に稱ひしは、身の僥倖なれ。しかけられたる戀なれば、とてもかくても揷頭の花、早りて手折らば妨げあらん、されば果報は寢て待てと、獨り心に歡ぶのみ。生憎に人目多くて、いひよる隙はなけれども、お駒が所要は人にゆづらず、いと信ふしく仕へしかば、お駒



も岐藏を憑もしきものなりと思ふにぞ今は只、彼處の使に相譚ばや。と幾遍か云はんとするに折の惡くて、徒に日を送る。是はや因果のはじめにて、あやしき蟲の所爲なるを、後こそおもひあはしけれ。かくて今茲も春暮れて、夏水無月の上浣になりぬ。不題尾花才作は、去ぬる頃ゆくりなく、お駒を諸平にかへせしは、私の事ならず、原是守の命せによればなか〳〵に思ひ絶えて、憾むる

氣色を見せねども小桔梗はとにかくに、遺憾さにうちも忘れず、才三郎が其日より、物思はしき面持を、理り也とも慰めかねし、母は恨に得も堪へず、有一日良人に對ひていふやう、お駒を諸平に取られしより、日ごろふれども音耗なきは、心得がたき事に侍り才三郎と云號けて、婚姻の日さへ定めしを、お駒が云はぬ事やはある、よしや一旦取復すとも、女子は家を嗣ぐによしなし。しからばこなたへ嫁らして、養育の恩に報ひ、好を結ぶがせめてもの、人の信に侍るかし、人して訪せ給はずや。といへば才作頭をうち掉り、會者定離とは佛の敎え、あふは別の始なるに、思はぬ人のおろかさよ、諸

平は元來利を射る白物、何を標的に女兒をもて、見るよしもなき浪人の、わが子の嫁におくるべき渠が薪を鬻し頃、しば〳〵こゝへ來つれども、發迹ては住處も近く、川一條を隔てながら胡越のごとくなりにたる、薄情は且く論せず、利の爲に子を棄て、又利の爲に子を取り復す、渠が如きは人面獸心、お駒に咎はなけれども、見かへるべうも思はぬかし、才三郎はわかきものゝことにしあれば人を恨み、味氣なく思ひもせん歟、さはれ女子は渠のみならず、速に念を絶えて、女ゝしく人に笑れ給ふな、よしなし事は聞くもうたてし。小桔

梗もかゝる事、再びいひも出で給ふな。と貌儼しく窘むる、あるじもおなじ物思ひ、遺憾さを云へばえに、云はぬはいとゞ苦しかるべし。浩處に跫然と、門邊に夥の人音して、いかめしく呼門ものあり、誰ぞと問へば思ひがけなき、小桔梗が兄牧村牛之介長通、此度君命を承り。美濃十八郡を巡歷せし、事の叙でに訪へるなり。尾花が退糧して後は、通家なれども主君へ憚り、詣來ることはなかりしに、いとめづらかにも訪はるゝこと、面目これにますものなし。とあるじ親子は雀躍して、軈て上座に請待し、寒暖を述べ無異を祝す、賓主